

諸堂の配置は第三圖に見るか如く、八行五列の礎石(金堂址)を有する坦地を中心として、南へ百四十一尺を距て、五行三列の礎石(中門址)を並列せる桑田あり、尚南方五十六尺餘の地に六行三列の礎石(總門址)あり、更に目を轉じて中門西方の斷崖を見るに、柱孔を穿ちたる大礎石の横はれるものあり、此北方人家の裏庭の垣根、并に畑地の土中にも、八個の礎石の埋没せるあり(西塔并に廻廊址)、此等諸堂地盤の高低は、第四圖によりて畧は想像することを得べし。

右の外金堂址の西北方高地及八阪神社裏道路の石垣、西塔下民家の庭先并に笠間川の北岸に、各數個の礎石の存するあり、左に項を別ちて更に詳説せん。

(一) 金堂址(第五圖、第十圖参照)

伽藍諸堂址中最高地にありて、其大部分は蜜柑畑及道路となり一隅に稻荷の小祠あり、礎石の總數は最初三十六を數へしものならんも、今は内二個を失ひ、又他の二個は其位置を移動し、原位置にあるものも其大半は土中に埋没せり、明治三十一年所轄村役場に於て取調へしと云ふ見取畧圖には本殿跡とありて礎石の數及其配置、余の想像に符合せり、礎石の原料は他の堂址に於けるものと共に、此地方一帯に露出せる良質の花崗岩なり、其形状は第九圖に示すが如く、柱座を圓形に繰出し尙壁付の柱には狹間石に連續すべき地覆座を繰出せること、彼の筑紫都府樓、大和山田寺、弘福寺比叢世尊寺、栗原慶寺等、奈良朝前期建立の諸堂の礎石に於けるか如し、只此寺址の礎石に特有の異例とも見るべきは、其地覆座の一端に深き溝を穿てること此れなり、構造上如何なる必要ありて

此れを穿ちしや、今遽かに斷言することを得ざるも恐らくは、狹間石と礎石とを連結すべき、鑿鐵を容るゝ溝穴なりしものならんか。

今此等の礎石並に地形により原狀を想像するに、此堂宇は最初高數尺の石壇上に建ち、正面七間(七十八尺四寸)側面四間(四十四尺)にして、前通一と側わを吹抜とすること、唐招提寺金堂、藥師寺金堂、興福寺東金堂、喜光寺本堂等に於けるか如くにして、堂内の平面は畧は唐招提寺金堂のそれに於けるか如く中央に須彌壇を築き、壇上總て礎石を疊みしものならんか。

(二) 中門址(第六圖参照)

金堂址の南にありて、同址より低きこと十二尺(礎石上端の差)の地にあり、現在殘礎十三個を算し後列中央の一個并に西端の一行三個を缺ぐ、形状は第九圖に示すが如く、金堂に於けるものと其様式を同ふす。

今礎石の形状并に其配置によりて、想像するに、中列の礎石のみに地覆座を有するは、必ず門址なりしなるべく、現在正面四間奥行二た間の如く見ゆるも、今假りに金堂より南門に至る伽藍地、中心線を引くときは其線は東より算し三間目の中央を通過すべく、此れに由つて其南端の柱礎一行を失ひしものなることを推定し得べし。

明治三十一年調製の見取圖には、二の門とありて礎石の數十八個共に完備せり、思ふに其後道路開鑿に際し取除きしものならん、斯く想定せば、此門址が、當初八脚門たりしこと類推するに難からず且此前面に更に一門址の存するを以て見れば之れ必ず中門に相當すべきものならん。

(三) 總門(第六圖参照)

中門を南に距ること九間餘、礎石の高差實に八尺五寸あり、五間二面にして今礎石二個を缺くと雖も、中門と全しく當初は五間三戸の一大門たりしこと明かなり(明治三十一年村役場調製の見取圖にも一の門とありて礎石の數十八個あり)。

而して前者は正面柱真々五十八尺側面同十九尺四寸にして、桁行に比し梁間頗る淺きに失するも、此門址は正面柱真々五十八尺七寸に對し側面同二十三尺四寸あり、其比例稍や宜しきを得たるが如し、建物の單層八脚門なりしや、將た又重層の樓門なりしやは、今日此れを推想するに苦むも、中門は其奥行の極めて淺く隨て構造不安定なる点より推して、單層なりしと斷言するに難からず、兩者共に當初は他の伽藍に於けるが如く、石壇上に建ちしものならんも、後世耕地となすの必要上壇石は殘らず取去られて、其一片だも遺存せざるは、遺憾なりと云ふべし、總門なる名稱は里人の稱ふるところに從ひ今假りに名つけしものなれど普通南大門と稱するものに該當す。

(四) 塔址及廻廊(第七圖参照)

中門以北の地盤は、第四圖に見るか如く、東西殆んど平坦なり、其西端に散点せる八個の礎石群は、他の礎石と稍や其形式を異にし、北方の四個(此石金堂礎石面より九尺低し)は上部を平らかに造りしのみにて何等の工作なく、他の二個は極めて低き柱座を繰出せり、又西南端の一個は深き穴を有すること、第九圖に示すが如し。

惟ふに深き穴を有する右の礎石は、縣下幾多の古刹、或は廢寺址の塔婆礎石の夫れに於けるが如く

塔の中真柱を樹つる礎石なりしものなるへく、今は斷崖に横はれるを以て、適確に其位置を知ることは能はざるも、著しく移動せしものと認むること能はず、柱座を有する前記二個の礎石も、塔に使用せしものと認めて不可ならんか、蓋し何れも其上面を横にせるが故に原位置に非らざるは明かなり、明治三十一年村役場調製の見取圖には塔跡とありて、礎石三個宛三列に並び、其間隔各八尺方二間四尺あり、其一隅のものに「中央凹形なり上邊一尺深一尺」とあれど、排列の方法塔としては疑はしき点あり測定を誤りしものに非らずんば、廻廊の一部に塔礎の混在せしを、過つて塔址と認めたるものならん。

上面平坦なる北方四個の礎石は整然として地中に配在し、表面火熱を受けし痕跡あり、惟ふに廻廊の一部にして後世火災に罹りしものならんか。現今金堂址稻荷社前の手水鉢に充用されつゝある礎石の斷片は、第九圖に示すが如く、確然たる塔婆真柱の礎石にして、前記のものに比し柱座を有する点稍や異れり、土人の言によれば、近年前記塔址附近より移置せしものなりと、惟ふに元東西兩塔ありて、東塔址を開墾するに當り、此れが破壊を惜み、精巧に工作せる中真柱の礎石のみを、西塔址に移置せしものならんか。

(五) カチツキ堂(第八圖参照)

伽藍址を距ること、東方四丁餘の山嶺にあり、礎石と認めらるゝもの六個凹地を圍みて点在す、其配置によりて觀るに元八個を有せしものゝ如し、此南約半町許りを距てたる山畑より、布目瓦の破片を發見せしことありと。

此堂址は其名の示すか如く昔鐘樓の在りしところなるべし、されど此等の礎石を觀るに殆んど人工を加へざる程度のものにして他の礎石に比すべくもあらず、伽藍の創立を奈良朝以前とせば、鐘樓の位置としては首肯し能はざる点あり、惟ふに遙かに後世に至り新たに建立せしものならん。

(六) 三百坊

伽藍址より南方二丁、笠間川を距てたる一帯の田地を總稱して三百坊と云ふ、礎石、瓦等の遺物を見ず、惟ふに塔頭の一區域たりしものならん。

(七)

其他金堂址西北方の狹隘なる高地にも第七圖に見るが如き礎石一個あり、中門のもの寸尺并に其様式を同ふす、農家の棗打石として中門址より移置せしものなるべし。

八阪神社裏道石垣に充用せる二個の礎石は、第七圖に示せるが如き様式にして、他に比し其形極めて小さく、柱座の圓徑僅かに一尺六寸(他の一個は一尺五寸)敷にて徑一尺八寸五分に過ぎず、經藏又は鐘樓の如き建物に使用されしものならんか。

西塔址を去る三十五六尺の南方なる人家の内に西塔址にある柱座附の礎石と同様の礎石一個あり、同址より移置せしものならんか。

(八) 瓦 (第十一圖、第十二圖參照)

又第三圖に示せるが如く、伽藍址の東南二町半許りの下方に、礎石と見ゆるもの三個ばかり地下深く埋没せりと、今回は此れを調査すること能はざりしも、恐らくは伽藍址より移置せしものゝ時を経るに隨ひ漸次埋没するに至りしものならんか。

附近の民家に所藏する瓦當は、其數十數個を算するも、種類は極めて少なく、第十一圖に掲ぐる三種類に限らるゝものゝ如し、又塔址及字井の尻附近には、俗に布目瓦と稱する平瓦の破片著しく散在し、其中には火熱に觸れしと認めらるゝものも亦少なからず混在せり。

今瓦各個に就きて子細に觀察するに、第十一圖中花瓦に載れる疏瓦は徑五寸八分あり、平城宮址より發見するものと其規を一にし、中房、蓮瓣、珠紋圈の地殆んど一平面にあり、隨て各圈線凡て同高に近く、周縁の内側は斜面となりて、鋸齒紋を有せり、只茲に異れるは中房大にして、周圍の圈線二重なると、蓮子の數彼れは六個なるも此れは十個を含み、且圈線凡て細きを以て極めて穩健の性質に富むこと之れなり、就中圈線の二重なるは異例に屬し、他に多く類例を見ること能はざるものなり、製作の年代は奈良朝前期中、稍や遅き部類に入るべきものゝ如し。

他の一は徑五寸ありて、中房内に蓮子六個を含み、複葉八瓣にして珠紋圈あり、周邊は内側灣形をなして鋸齒紋を有すること、法華寺發見のものと同一にして、彼の恭仁宮遺址唐招提寺等より出土するものと同巧異曲の意匠なるも、蓮瓣細長なるが故に、一層華麗の感を強ふす、此疏瓦は現今只一個を存するのみにして、他に發見せしことなしと云ふ、製作の年代は前者よりも稍遅く、奈良朝後期に屬するものゝ如し。

花瓦は瓦當にて巾一尺厚二寸五分あり、大安寺額安寺平城宮址等より發見するものと類似せるが如きも、蔓文中央の起点は前記諸寺のものよりも稍や其趣を異にす、其縦斷面は第十二圖に見るが如く、奈良朝前期の特徴たる長き頤を有せり、此れに由て觀るに此花瓦は、此上に載れる大形の疏瓦

と同時に製作せられたるものなるべし。

因に記す大形の疏瓦は同地増田亥之吉、小形疏瓦は同森田由太郎、花瓦は同中森庄五郎諸氏の所藏にかゝるものなり。

記録並に傳説

【大和史料】 毛原伽藍の條に開書覺書なるものを引用す、其全文左の如し。

開書覺書曰毛原ニ言ハ傳ラニハ柿本人丸此所ニ大佛殿建立ノ礎有跡ト言、在所中ニ礎石百七十二有、柱ノ間壹丈程何モ川石ノ徑、三尺餘ノ青石也柱ノ居穴有、金堂ノ跡ト見ユル前ニ相心門二、門三、門ノ礎石三四ノ十二ツ、何レモ有、石ノ大サ柱間金堂ニ同シ東西兩塔ノ礎石右ニ同シ東金西金ノ兩堂ノ居石ハ不レ見ユ瓦塚幾ツモ有、此下ニ有成覽瓦塚尋ニ碎テ軒々平瓦ノ軒瓦ノ八寸程成ナ一ツ求得、反布ノ目ニテ厚サ二寸餘有、鼻瓦ニテ文ハ十六葉菊也徑、一尺二寸、是ハ時ニ有司ニ上ニ稀レ也三ノ門より二町餘峠阪也土中ニ石ノ雁木有、由、川隔テ四五町程モ田地也古ヘノ寺跡ニテ今ニ字名ハ寺號ト云二三町モ隔テ鐘樓ノ跡ト云礎有、十二有、右同山ノ尾崎也所、老人共尋トモ舊記無之如何なる人の著述にして、何時の頃見聞せしものなるや審かならざるも。

「礎石百七十二有」とあり、現に配在せるものは總數僅かに七十二に過ぎず、此時代に於ては尙多數の礎石を遺存せしものならんか。次に「相心門二ノ門三ノ門の礎石三四の十二ツ、何れも有」とあり、此れに因れば現在の二門址以外に、門址と認めらるゝもの存在せしもの、如し、されど礎石の数の「三四の十二」とは、三個苑四列と云ふ意味なるか如きも、現存せる門址の礎石は實測圖に示せるが如く此れよ

りも遙かに多く、且寸面一定して、後世他より補充せしものとも認め難きを以て見れば、此著書中には其名の示すが如く、實地を踏査せずして、所謂開書を蒐録せしものもあるべく、隨て前記の三門址説も何等かの誤謬より出でしものに非らざるなきか、(他にも實地に照し符合せざる点あるが如し)。次に「平瓦云々」とあるは花瓦を指せしものなるべく「文は十六葉菊也徑一尺二寸」とあるは疏瓦のことにして、徑りは廻りの誤りならんか。

他に據るべき舊記なきも、口碑の傳ふるところによれば、「往古此地に大建築ありて、王侯の宮居たりしことあり、鎮守八阪神社の地中に記録を藏す、堂前の井穴亦由緒あり」と固より荒唐無稽の妄説たるべきも、第三圖に示せる金堂中門間の古井は、徑四尺深約廿四五尺あり、古來斷水せる由なるも、今に保存せられて字に井の尻なる名稱を殘せり。

大和名所圖繪に

山邊の御井氣原村にあり

と記せるものに該當するか如し。

隣村東里村大字下笠間春覺寺に、丈け三尺許りなる木彫極彩色の地藏菩薩立像(鎌倉時代の彫刻)等身素木の不空縹索觀音立像(平安時代の彫刻)丈け三尺五寸木彫單彩の十二神將内三體(平安時代の彫刻)并に藥師座像其他あり、先年賣却せし數軀の佛體と共に、明治の初年同字藥師堂より移置せしものにして、區民の言によれば、昔毛原の伽藍にありしものなりと。

又同村大字上笠間なる廢寺妙樂寺に、木彫金色にして丈け二尺五寸許りなる釋迦の立像あり、第十三

圖に示すが如き鎌倉期の傑作にして、嵯峨清涼寺、仙臺龍寶寺、唐招提寺禮堂等の釋迦如來と同一の系統に屬す、之れ亦此地方に於て昔毛原の伽藍に安置せられしものと傳説す。

結 論

以上各項に述べしところに因つて推考するに、當遺址は確然たる廢寺址にして、其創立は遺物即礎石の様式并に其配置、出土せる瓦當の文様より推して、奈良朝時代中葉の頃と判定して大過なかるべし。或一部の説をなすものは曰く「斯く大規模の巨刹にして文獻上更に見るところなく、且其寺號さへも傳はらざるは、工事半ばに至らずして發願挫折し、遂に完成を見るに至らざりしものならん」と、其云ふところ稍肯綮に當れるが如きも、工事に先つて各堂宇の礎石のみを造り、按排配列し終るが如きこと、施工上あり得べからざるのみならず、現に火災に罹れりと認めらるゝ、礎石并に瓦片の至る所に散在せるあり、實地に臨みて現狀を視察せば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。

翻つて遺瓦の種類を観るに、前記三種の奈良朝式瓦當の外、後世補足のものを發見すること能はざるは、此地不便にして創立の後寺運復た振はず幾何ならずして遂に廢絶せしか、或は其一部のみを残して他に移轉するに至りしものならん。

又毛原は其地勢上伊賀の諸邑に便にして、反て南都に遠く、古來屢同國に隸屬せしもの、如し。

【東大寺要録】 封戸水田章天平廿年の施入狀に

伊賀國笠間莊四十二町二百步

とあり、毛原は常に笠間の屬邑となれるのみならず、地理の關係上笠間にして伊賀に屬すれば、自然

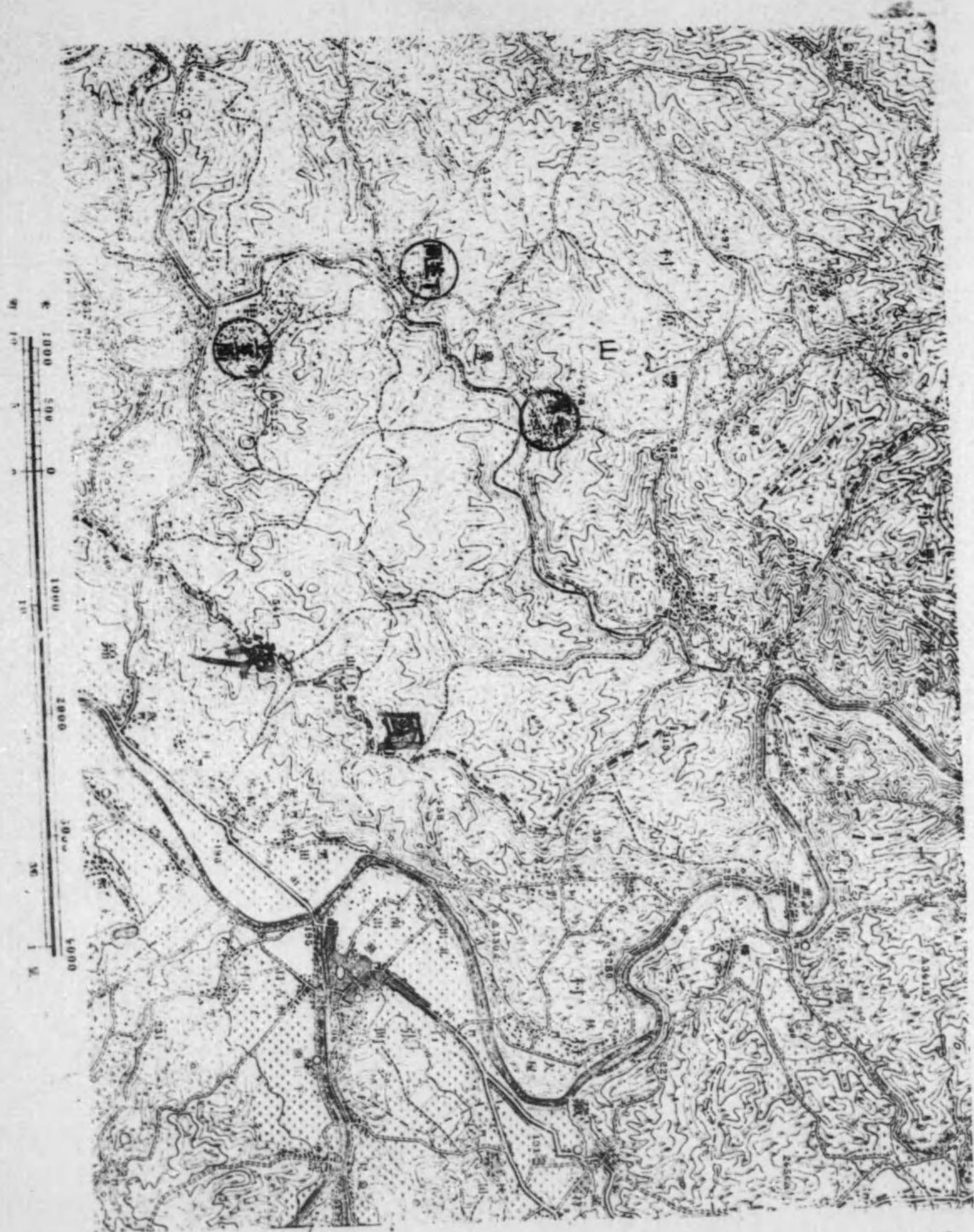
其内に入るべきものなり。

其後に至るも笠間川沿岸一帯の地は、常に所領の争ひを招きしもの、如く、元祿年間下笠間の人藤井甚九郎に依て、始めて現今の國界を確立せしものなりと、されば寺門隆盛の頃は、大和よりも反て伊賀地方に多くの賽者を有せしものなるべく、隨て伽藍廢絶の後大和の地誌、其他の文書に閑却せらるゝに至りしこと蓋當然なりと云ふべし。

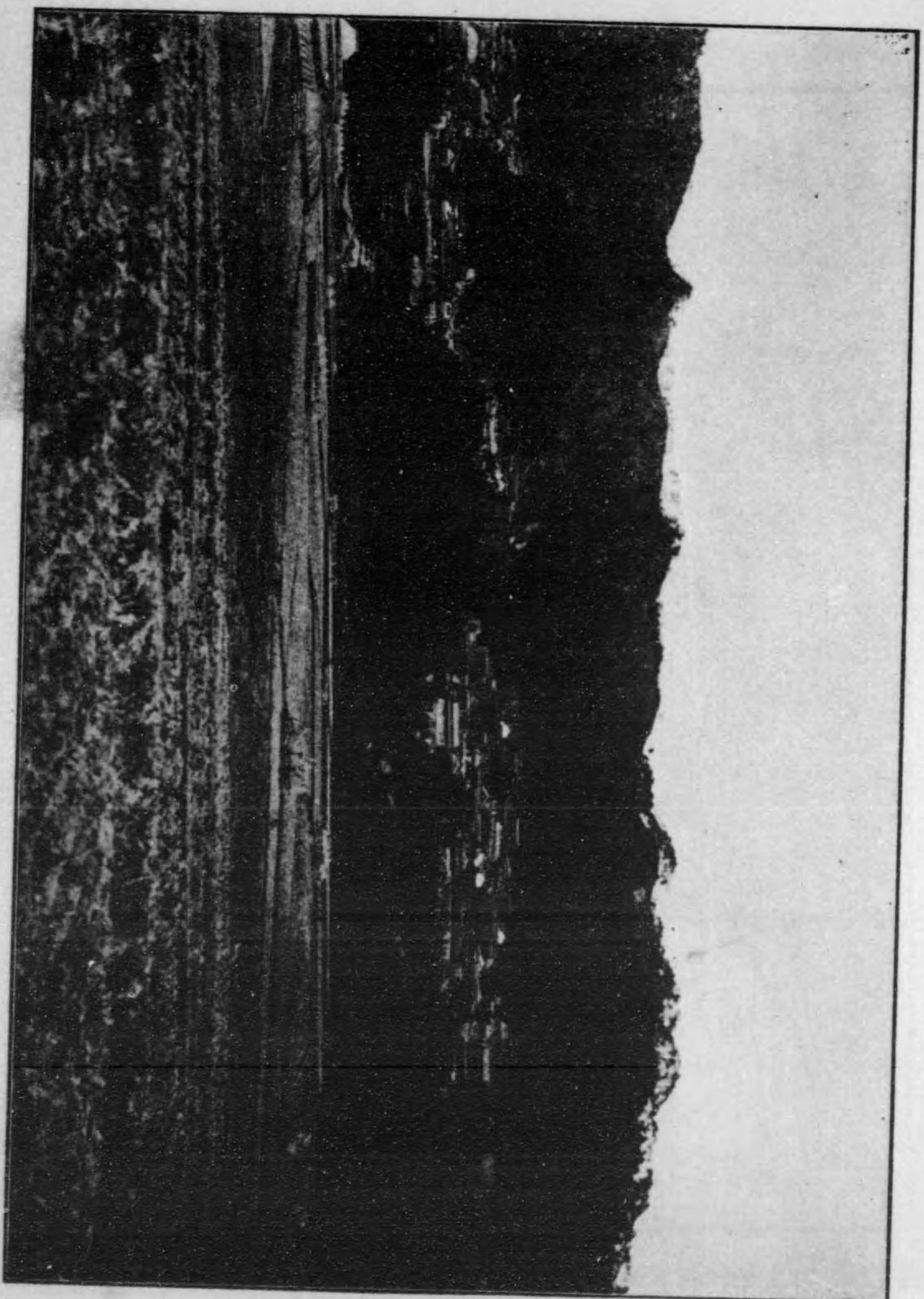
今實測せる礎石の配置、并に地形現狀を基本とし、奈良朝創建の諸大寺の平面を參酌して、假りに創立當時の原狀を按すれば、第十四圖伽藍復原圖の如く金堂を中樞として、左右對照に各堂塔を配列せしものなるべく、現今東邊の地盤は多く缺き取られて傾斜地となれるも、西方坦地に塔址(其位置稍不正確ナルモ)并に廻廊の一部の存せるあり、且東塔の中心礎石と認めらるゝものも現存せるを以て、之れが原狀を推定するに難からず。次に鐘樓、經藏の位置とも見るべき場所は、今宅地となりて實査すること能はざるも、講堂と共に此時代の伽藍の形式上必須のものなるのみならず相當地面の存するあり、又所屬不明の礎石中前項に記載せしが如く會ま此等の建物に適合するものあるを以て、假に其位置を掲出することとせり。次に講堂の位置は、大部分背後の丘腹中に入ることとなるも、山麓地の常として後世崩落せしものと認め得られざるに非ず、東西兩塔を具備せる奈良朝の伽藍として、講堂を缺くは異例に屬するを以て之又假に想定記入せり。尙此伽藍に附屬すべき幾多僧房の笠間川を挿みて存在せしことは、對岸に三百坊なる字を遺せるに徴し推測することを得へし。

今此金堂を、同一の規模を有する、彼の唐招提寺金堂に比するに、彼れの正面九十尺二寸、側面四十

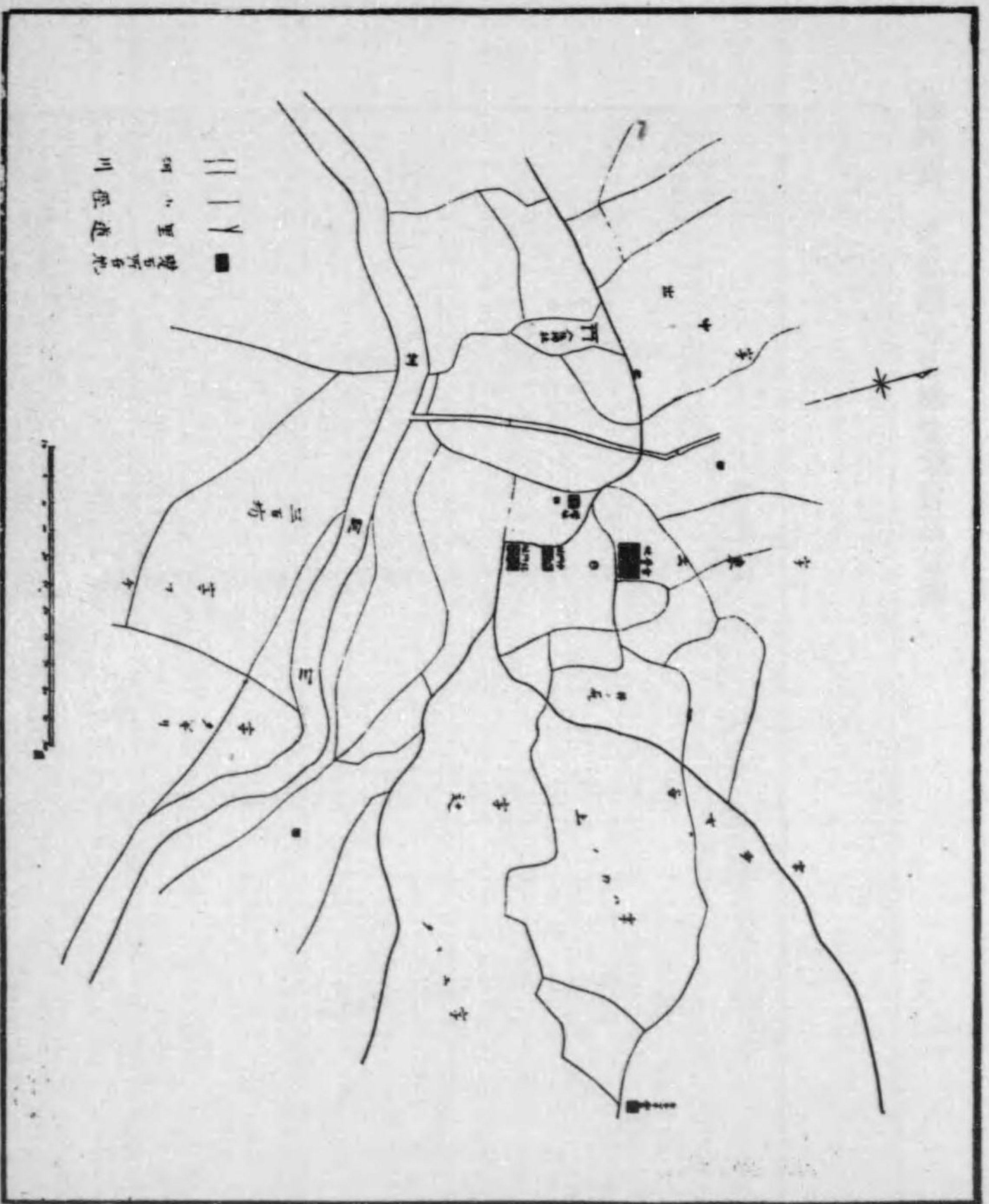
八尺なるに對し、此遺址の正面七十八尺四寸、側面四十四尺なるは、稍や遜色あるが如きも其全景の前に笠間川の碧潭を湛へ、背に幽邃なる青巒を控へて、段階状をなせる丘腹に青瑣丹楹相映せる壯觀は、蓋し平地伽藍の遠く及ばざるところなりしなるべし。斯かる靈刹の遺跡も、今一朝にして永遠に湮滅に歸するは、惜みても尙餘りあることと云ふべし。



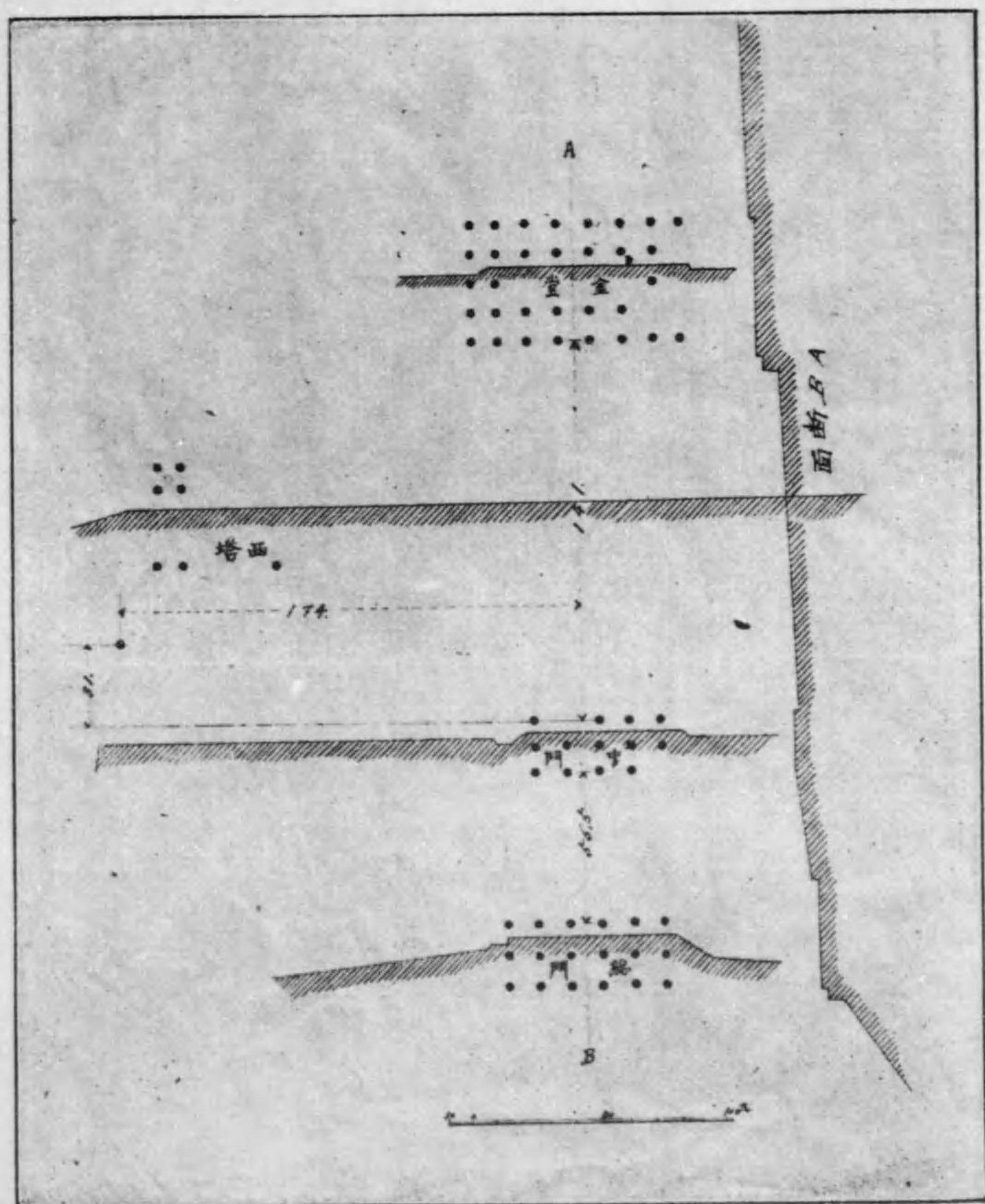
第二圖 毛原附近之圖



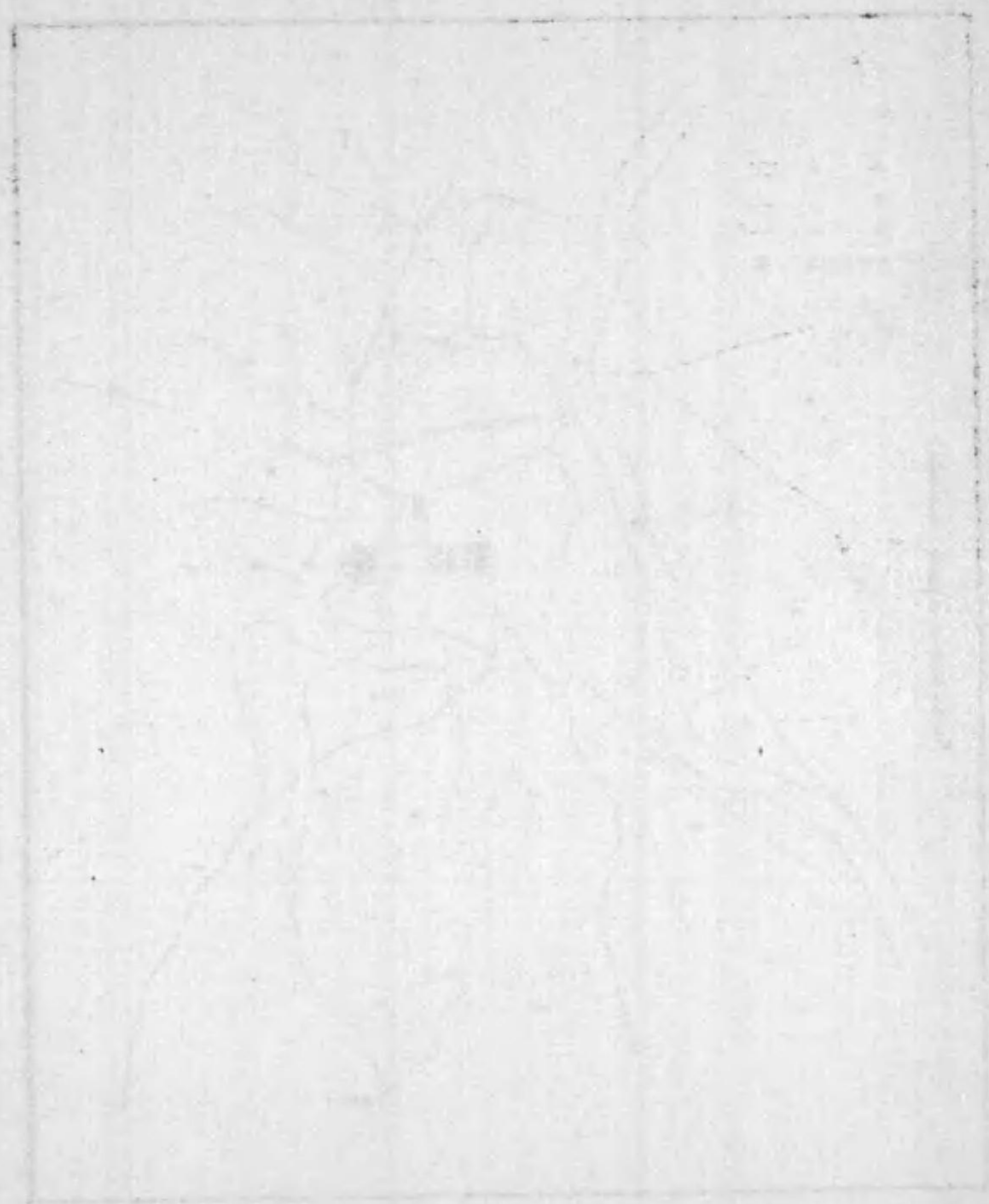
第二圖 毛原 全景 (圖ノ中央ニ當リ人家密集セリ)
○トニ口即チ御懸地ナリ)

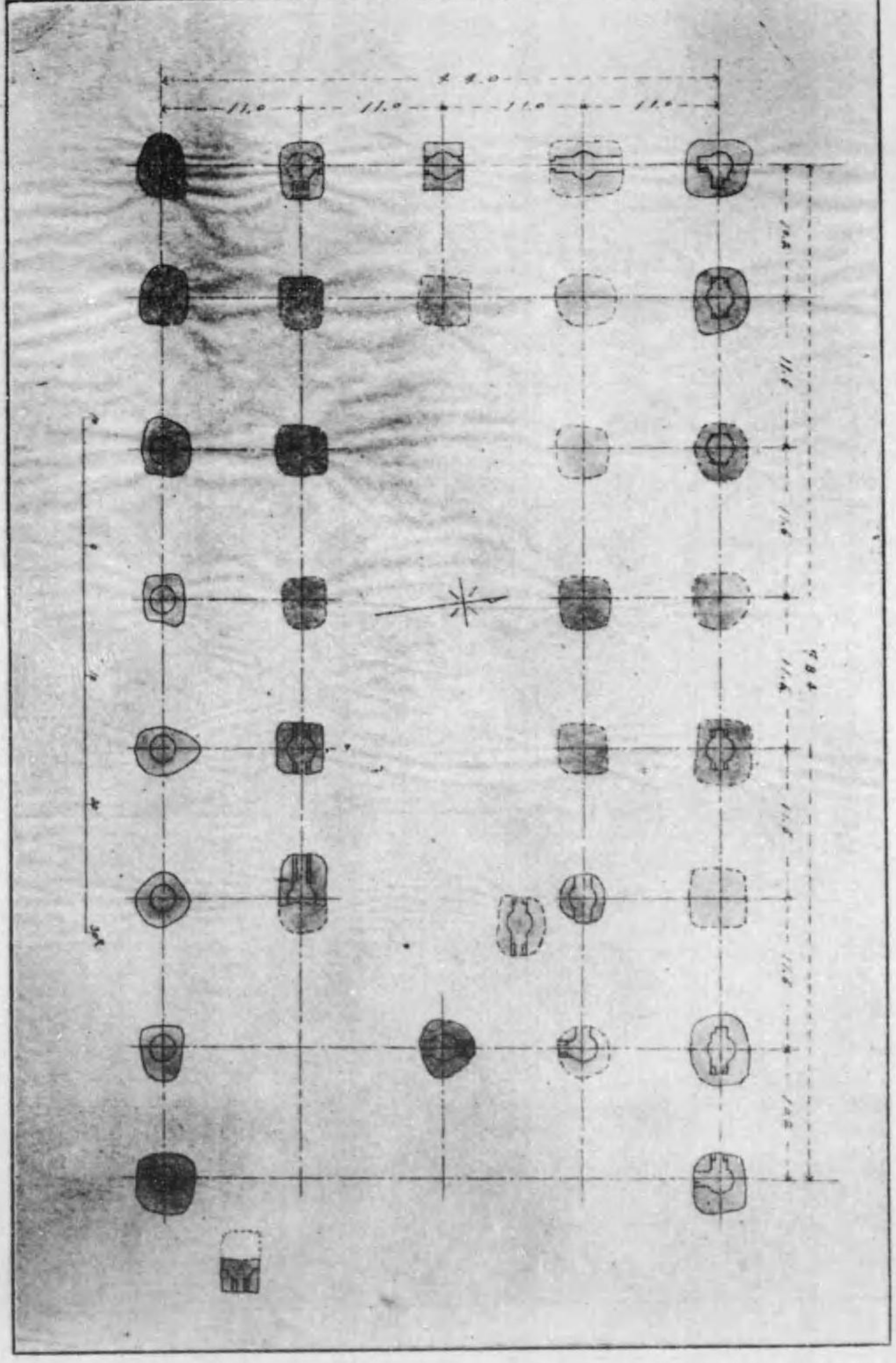


第三圖 毛原廢寺址附近畧圖

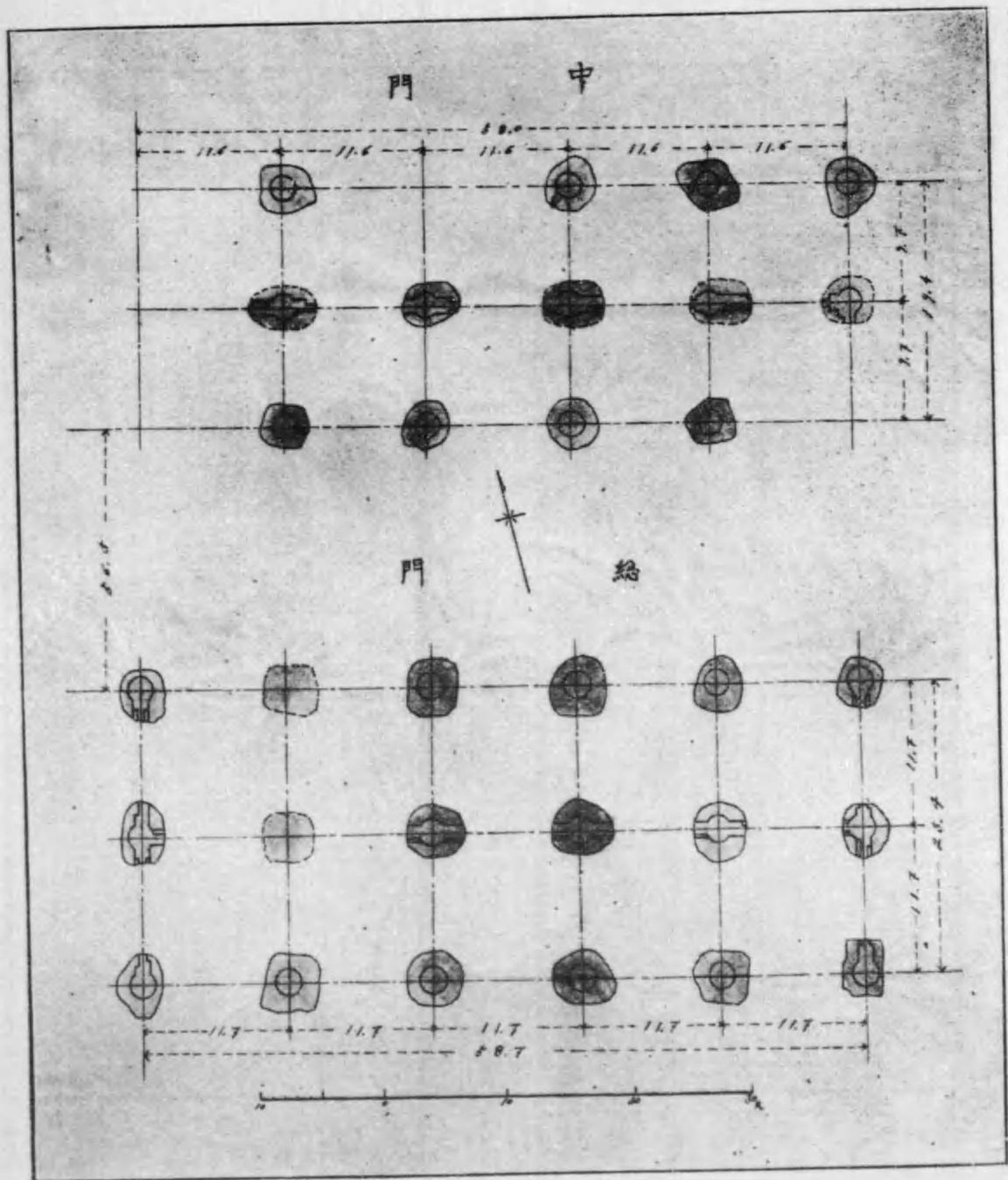


第四圖 毛原廢寺址諸堂地盤高低圖

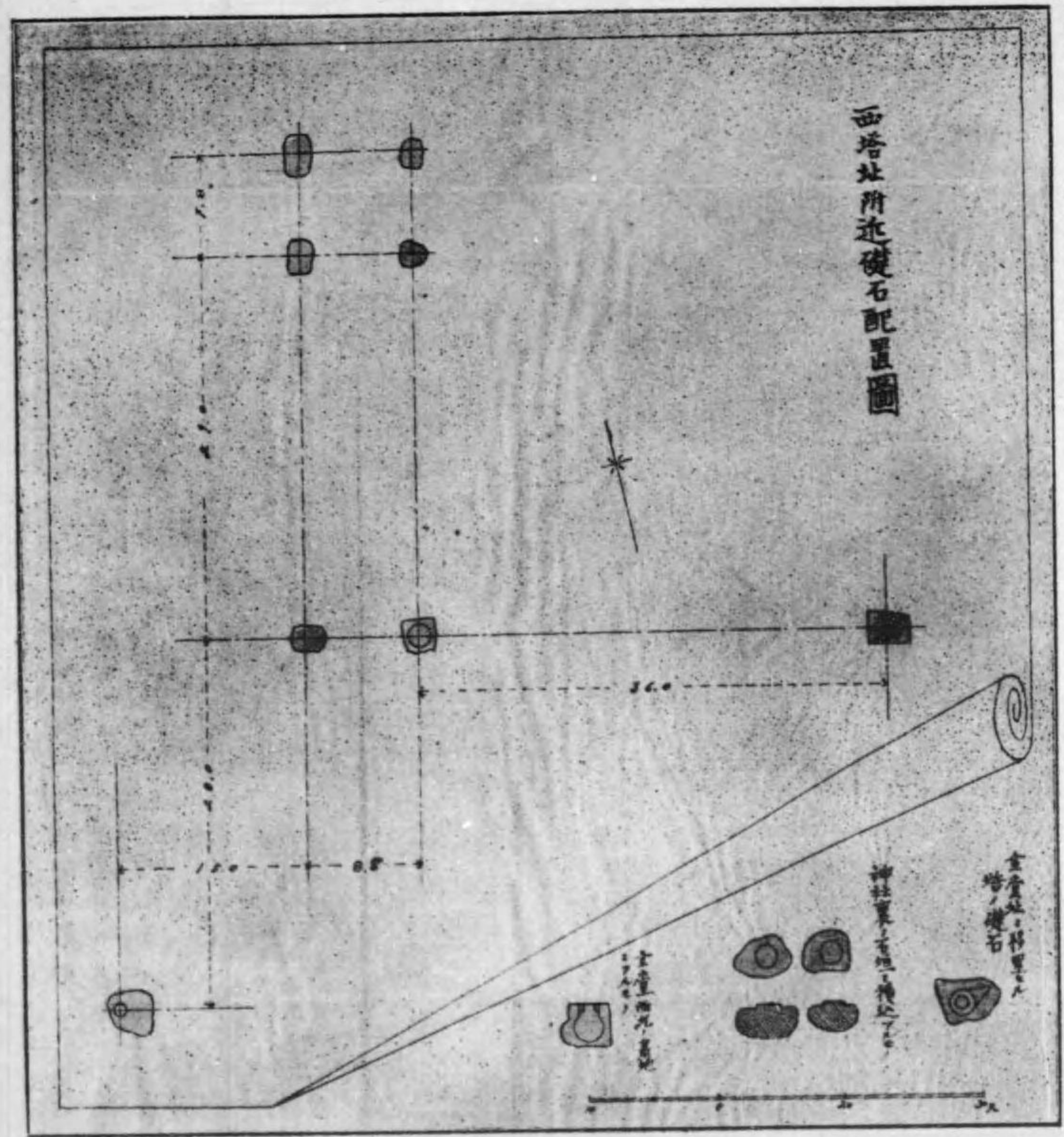




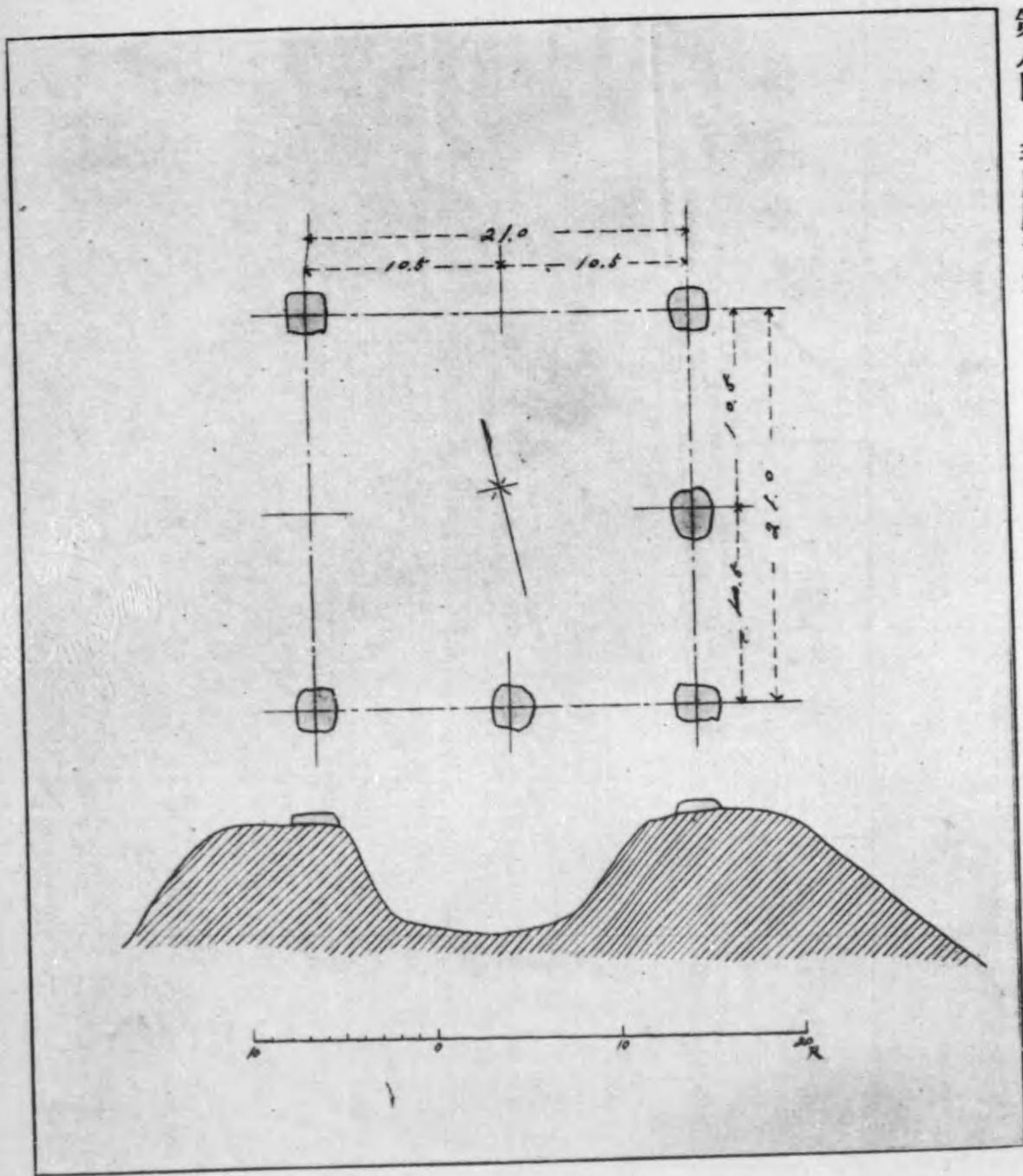
第五圖 毛原庵寺址金堂礎石配置圖 (点線ハ明渡ノモノヲ示ス)



第六圖 毛原廢寺址中門及總門礎石配置圖 (点線へ埋没セ
ルモノヲ示ス)

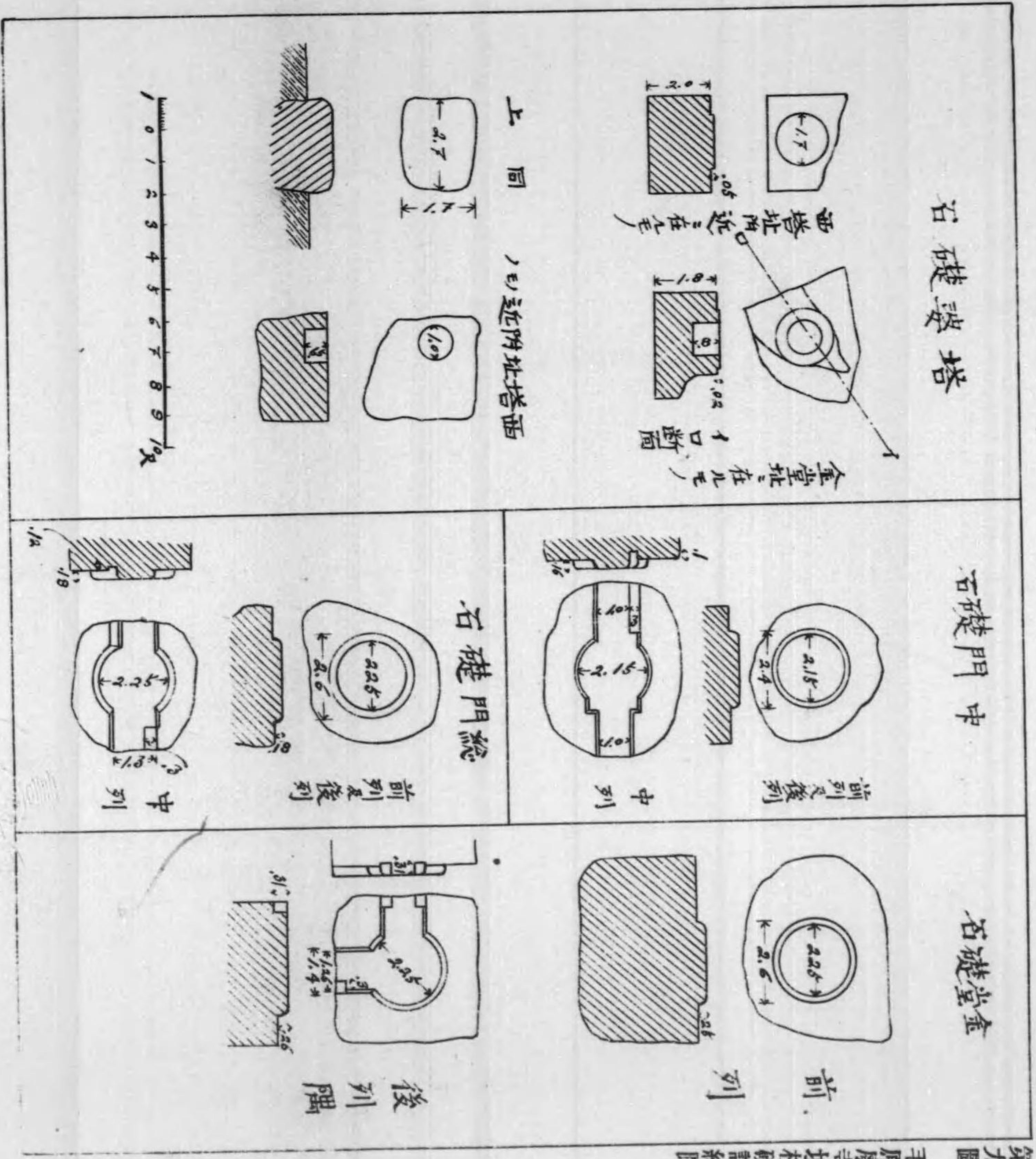


第七圖 毛原廢寺址



第八圖 毛原廢寺址カ子ツキ堂礎石配置圖

第九圖 毛原廣寺址柱礎詳細圖

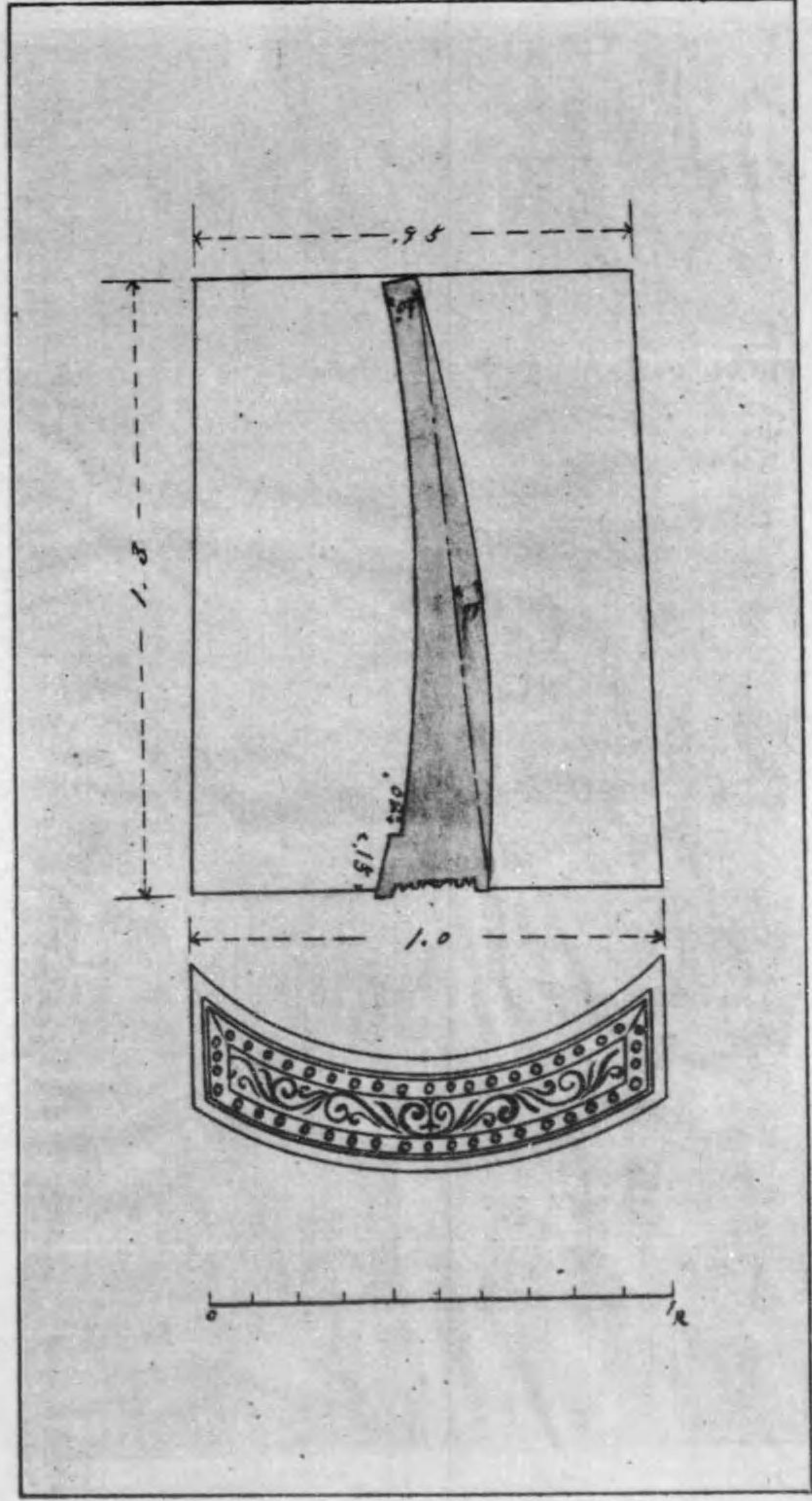




第十圖 毛原廢寺址金堂殘礎



第十一圖 毛原廢寺址ヨリ發掘ノ疏瓦及花瓦



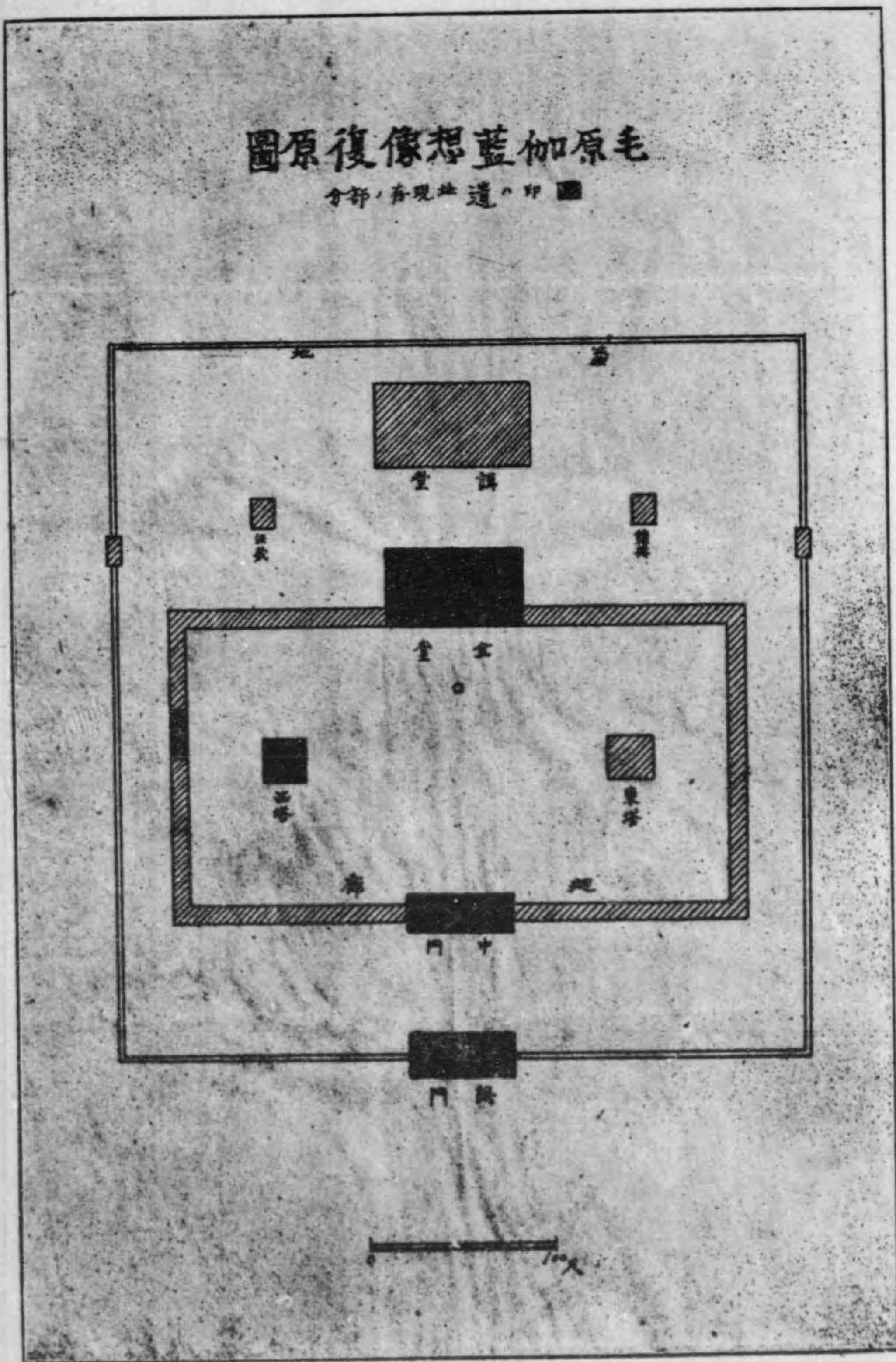
第十二圖 毛原慶寺址ヨリ出土セル花瓦詳細圖



第十三圖 山邊郡東里村大字上笠間妙樂寺釋迦如來木像

毛原伽藍想像復原圖

圖印遺址發現部



附

錄

史蹟標榜建設個所一覽

所在	個所	一覽
奈良市本守町	官幣大社大神神社	山邊郡丹波市町
全市漢國町	村社 率川	磯城郡 都村
全市春日野町	村社 漢國	全郡纏向村
全市雜司町	村社 水室	全郡纏向村
全市春日野町	縣社 手向山	全郡三輪町
生駒郡伏見村	官幣大社春日神社	宇陀郡榛原町
全郡山見村	鳴雷	南葛城郡忍海村
全郡山見村	菅原	全郡吐田郷村
全郡山見村	羅城門	全郡葛城村
全郡山見村	超昇寺	全郡御所町
全郡山見村	藥園	全郡葛城村
全郡山見村	今國	全郡掖上村
全郡山見村	慈光	全郡忍海村
山邊郡福住村	都介水室	高市郡金橋村
全郡丹波市町	良因寺	村社 川俣
全郡丹波市町	本光明寺	村社 飛鳥坐
全郡丹波市町		村社 飛鳥坐

永久寺址

鏡作座天照御魂神社

他田座天照御魂神社

卷向坐若御魂神社ノ靈蹟

海石榴市

丹生神社

葛木坐火雷神社

葛木一言主神社

葛木御歳神社

鴨都波八重事代主神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

高鴨神社

全	郡飛鳥村	法興寺	址
全	郡全	豐浦寺	址
全	郡高市村	川原寺	址
全	郡全	定林寺	址
全	郡飛鳥村	大官大寺	址
全	郡阪合村	檜隈寺	址
全	郡白樫村	本藥師寺	址
全	郡高市村	坂田金剛寺	址
全	郡白樫村	益田岩	墳
全	郡阪合村	岩屋山	墳
全	郡全	率牛子	塚
全	郡越智國村	サヲ谷	墳
全	郡白樫村	小谷古	墳
全	郡高市村	島莊石舞臺	

史蹟勝地保存費補助個所一覽

補助年度別	所	在名	稱	補助金額	施設事業ノ大要
大正元年度	全	添上郡月瀬村	月瀬梅林	三〇〇〇〇	梅林ノ保護及苗木ノ補植、新植
全	生駒郡都跡村	平城宮址	一〇〇〇〇	四至ノ境界石標ヲ設置シ建碑及道路ノ修築ヲナス	
全	全	郡龍田町	龍田川楓樹	一〇〇〇〇	楓樹ノ保護及増植
全	磯城郡多武峰村	多武峰	一〇〇〇〇	境内外櫻楓樹ヲ増植ス	
全	高市郡高市村	弘福寺礎石		管理及舊伽藍境界標設置等	
全	全	郡白樫村	本藥師寺礎石	九〇〇〇	境域及道路ヲ修メ礎石ノ移動防止工事ヲ施ス
全	全	郡飛鳥村	大官大寺趾	三〇〇〇〇	境界標ヲ入レ伽藍址ノ現形ヲ破壊セサル保存工事ヲ行フ
全	吉野郡吉野村	吉野山保勝	三〇〇〇〇	吉野皇居實城寺跡ノ保存及櫻樹植付	
大正二年度	全	添上郡月瀬村	月瀬梅林	二五〇〇〇	更ニ一町歩開墾シ植樹ヲナス
全	生駒郡龍田町	龍田川楓樹	六〇〇〇	楓樹ノ保護觀客接待ノ設備ヲ行フ	
全	磯城郡初瀬町	長谷寺保勝	六〇〇〇	牡丹園ノ増設愛宕山林相ノ整理	
全	全	郡多武峰村	多武峰	八〇〇〇	土地ヲ買入レ植樹ヲ行フ
全	全	郡櫻井町	阿倍ノ石櫛	一六〇〇〇	入口ニ木柵ヲ立テ鍵ヲ附ス

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
大正二年度	磯城郡櫻井町	米谷ノ石柳	一六、〇〇〇	地蔵ヲ他ニ移動シ柵ヲ設ケ鏡ヲ附ス																
	高市郡高市村	龍福寺石塔婆	四、八〇〇	周圍ニ柵ヲ設ケ																
	全郡阪合村	檜前寺址	八、八〇〇	亡セル若干ノ礎石跡ハ砂利ヲ入レ尙殘存セル礎石ノ位置ヲ明シカニスルタメ附近ヲ掃除シテ標ヲ立ツ																
	全郡白檀村	小谷古墳	三六、八〇〇	美道入口ノ泥土ヲ除キ木柵ヲ設ケ通路ヲ修繕																
	全郡阪合村	牽牛子塚	九、六〇〇																	
	全郡高市村	都塚	一四、四〇〇	木柵ヲ設ケ																
	南葛城郡葛村	水泥ノ古墳	二六、〇〇〇	美道入口ノ泥土ヲ除キ柵ヲ設ケ																
	全郡全	稻宿ノ古墳	五、六〇〇	柵ヲ設ケ																
	全郡忍海村	笛吹ノ古墳	三三、〇〇〇	全																
	吉野郡吉野村	吉野山保勝	二五、〇〇〇	土地ノ買入、櫻樹ノ植付、史蹟ノ保存等																
	全郡黒龍村	鳳閣寺廟塔	一一、〇〇〇	文字ノ磨滅ヲ防クヘキ設備ヲナス																
大正三年度	添上郡月瀬村	月瀬梅林	二〇〇、〇〇〇	梅樹ノ増殖、施肥、開墾																
	磯城郡初瀬町	長谷寺保勝	七〇、〇〇〇	牡丹、櫻樹ノ保護、増殖並開花ノ手當ヲ爲ス																
	生駒郡龍田町	龍田川楓樹	三〇、〇〇〇	楓樹ノ保護、増殖、其他苗圃ノ新設																
	吉野郡吉野村	吉野山保勝	三〇、〇〇〇	土地買収、櫻樹保護増殖、名勝舊蹟ノ修理																
	吉野郡吉野村	吉野山保勝	二五、〇〇〇	道路改修、開花期ノ設備																

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
大正三年度	奈良市保勝	地獄谷石佛像	七〇、〇〇〇	木柵ヲ設ケ指導標ヲ建設ス																
	山邊郡都介野村	小治田朝臣安磨墓	四〇、〇〇〇	發掘セル墓誌ノ模造ト遺骨トヲ墓誌ノ發掘場所ニ埋メ墓ヲ築キ其上ニ石標ヲ建設ス																
	磯城郡多武峯村	栗原寺址	三〇、〇〇〇	二十一尺方形ニ存在セル礎石ノ周圍ニ木柵ヲ設ケ																
	高市郡白檀村	菖蒲池古墳	三〇、〇〇〇	石柵内ノ泥土ヲ除キ美道ヲ平カニシ正面ニ堅牢ナル木柵ヲ設ケ																
	吉野郡吉野村	吉野山保勝	三〇、〇〇〇	上屋ヲ設ケ風雨ヲ防ク																
大正四年度	添上郡月瀬村	月瀬梅林	二〇〇、〇〇〇	梅樹ノ保護増殖施肥其他開花期ノ施設																
	磯城郡初瀬町	長谷寺保勝	五〇、〇〇〇	牡丹ノ保護増殖施肥其他開花期ノ諸施設																
	生駒郡龍田町	龍田川楓樹	三〇、〇〇〇	楓苗木ノ増殖、浚川、堤防修繕、施肥等																
	吉野郡吉野村	吉野山保勝	二五、〇〇〇	土地買収、櫻樹増殖、道路修繕、史蹟ノ保存其他開花期ノ諸施設																
	添上郡平和村	稗田阿禮舊蹟	四〇、〇〇〇	舊蹟タル村社賣田神社境内ニ由緒書揭示場建築																
	生駒郡南生駒村	行基菩薩墓所	五〇、〇〇〇	墓所ヲ修築シ堂宇其他ヲ復舊建設ス																
	全郡平城村	香水閣	五〇、〇〇〇	井石垣ヲ修築シ閣ノ周圍ニ石玉垣ヲ建設ス																
	磯城郡多武峯村	多武峯指導石	六〇、〇〇〇	三十五本ノ指導石ヲ修繕、建築ス																
	全郡全	ハナヤマ古墳	二〇、〇〇〇	扉ヲ有スル木柵ヲ設ケ扉ニハ錠ヲ附シ狼ニ出内ヲ防ク																
	南葛城郡葛村	權現堂古墳	四、七五〇	全																

大正四年度	高市郡天満村	天満社神寶塔並層塔	三〇〇〇〇	塔ノ全部ヲ一旦解放シコンクリートヲ以テ地盤ヲ固メ塔ヲ建設シ其周圍ニ木柵ヲ設ク梅樹大小六百本増植在來梅樹壹萬餘株ノ土地耕耘、施肥開花期ノ設備等
大正五年度	添上郡月瀬村	月瀬梅林	二〇〇〇〇	楓樹ノ増植、保護施肥、其他園内ノ設備
全	生駒郡龍田町	龍田川楓樹	四〇〇〇〇	牡丹園ノ擴張、増植、手入、施肥、開花期ノ諸設備
全	磯城郡初瀬町	長谷寺保勝	六〇〇〇〇	勝地購入、楓樹増植、施肥
全	磯城郡多武峯村	多武峯保勝	四〇〇〇〇	土地買收、櫻樹増植、山内史蹟保存、開花期ノ諸設備
全	吉野郡吉野村	吉野山保勝	二五〇〇〇〇	梁及桁行十八尺ノ屋形ヲ建テ雨露風化ノ害ヲ防ク
全	添上郡田原村	塔ノ森石塔	三〇〇〇〇	講堂、金堂及塔址ノ土地ヲ買收及礎石ヲ舊位置ニ復シテ舊ノ形狀ヲ存ス
全	磯城郡安倍村	山田寺址	一〇〇〇〇〇	崩壊セル塔ヲ積重ネ周圍ニ木柵(扉付)ヲ設ケ參道ヲ修築ス
全	磯城郡多武峯村	談山神社十三重石塔	三〇〇〇〇	苗木仕立、梅樹五百本増植、約壹萬本ノ大小梅樹ノ施肥、土地耕耘、開花期ノ設備等
大正六年度	添上郡月瀬村	月瀬梅林	二〇〇〇〇〇	楓樹増植、保護施肥、園内ノ擴張、諸設備等
全	生駒郡龍田町	龍田川楓樹	四〇〇〇〇	壯丹増植、保護施肥、開花期ノ諸設備等
全	磯城郡初瀬町	長谷寺保勝	七〇〇〇〇	楓櫻樹ノ増植、施肥等
全	全郡多武峯村	多武峯保勝	五〇〇〇〇	土地買收、櫻樹増植、施肥、山内史蹟保存開花期ノ諸設備等
全	吉野郡吉野村	吉野山保勝	二五〇〇〇〇	

大正七年三月二十五日印刷
大正七年三月三十一日發行

奈良縣

印刷者 乾 善 兵 衛
奈良市橋本町三十六番地

印刷所 奈良市橋本町三十六番地
奈 良 明 新 社

長電二四六番

第五回奈良縣史蹟勝地調查會報告書別冊

續奈良縣金石年表

奈良縣

326-226



第五回奈良縣史蹟勝地調查會報告書別冊

縣金石年表

奈良縣



凡 例。

- 一。本編は第三回報告書別冊として發表せし【奈良縣金石年表】中の誤謬を正し脱漏を補ひしものにして、訂正の個所は總て備考欄に記入せり。
- 一。表中に掲げしは慶長以前に屬せるものゝみにして、單に金石及瓦に止らず、其範圍を擴張して棟札は勿論、建造物工藝品又は彫刻物等の一部に建立、創作、再建又は修繕等の年月を刻し或は墨書朱書せしもの等一切を含ましめたり。其現存せるや否や詳かならざるものは小字を用ひ、亡失確實なるものは「亡」字を附記せる事前編に同じ。
- 一。曾て奈良縣に在りて現今他に移りしもの、及他より移されて縣内に在るものは共に此を掲載せり。
- 一。石礫墓標其他等にして多數重疊せるもの、或は大部分地中に埋没せしもの又は轉倒して碑面の地面に接せるもの等の調査は總て他日に譲れり。

一。「石佛」と命名せしものの中には墓標として建設せし者をも含ましめたり、其最も多きは背光(舟後光)型の輪廓を有し、地藏彌陀等を厚肉に刻せしものなり。佛像の二軀併立せると「双石佛」と稱す。佛像の種類及姿勢等は總て備考欄に記す。

一。備考欄の名稱に「背光」又は「板碑」と冠せしもの、及「背光型」「板碑型」と記せしは共に其輪廓を指示せしものにして、前者は佛像の背光(舟後光)に因し、後者は板碑(關東地方に普通にして扁平なるもの)に類せるものなり、板碑は所在地に従ひ多少様式に變化あるも、廣義に於ては「板碑」中には總て此種の碑を含有せしめざるべし、然る時は「板碑」といふ名稱は甚だ不適當なるも、茲には姑く從來の稱呼に従ひ「型」字を附記(背光又は板碑と冠せし者には「型」字を記さざるも「型」字を附せし者と同一なり)混亂を避くる事とせり。

一。備考欄記入の方法は間々多少長文に流れ繁に過るの嫌なきに非ざるも、要

するに圖版に收めし以外の各種の實例を簡単に擧ぐるを勉めしに外ならず、而して必要と認めし場合には年月日及工人の姓名を掲げたり。

一。所在地名の中難讀と認めらるゝ文字には、陸地測量部發行二萬分一及五萬分地形圖に據りて假名を附し實地踏査者の便に供せり。

一。半截五輪、背光五輪、背光双五輪、背光寶篋印塔等の稱呼に就て不明の點あらば【奈良縣金石年表】卷末附圖第十六版を参照せらるべし。

一。曩に未調査の爲め掲げざりし山邊、宇智、宇陀及吉野諸郡の大部分の金石は、今に至るも尙調査の機無く、從て本表にも亦記載するを得ざりしを以て此等は總て續續編に譲る。

一。【磯城郡誌】第五〇八頁、櫻井町大字上宮春日神社の記事中、境内に「はやひ燈正治二年」の銘ある自然石の石燈、及同所上宮寺に天祿四年の磬を藏せる由を記せるも、前者は後の模造にして、後者は天保四年の刻銘ある磬

の誤りなるを以て表に掲げず。

一。本表中には奈良縣立師範學校教員心得高田十郎氏が、公務の餘暇各所を踏査して發見せられたる石文約百六十を含めり。且つ氏は余が曩に一度調査せし場所を周到の注意を以て再三調査せられ、余の誤脱を訂正せられし事一再に止らず、此等は總て名稱に黒點を附し、氏の異常なる厚志に對し謹て謝意を表す

大正六年七月七日

奈良縣史蹟調査會委員 天 沼 俊 一



天皇 元號	千支	名	稱	所在地名	備	考	西曆
聖武	神龜 甲子						七二四
	二乙丑						七二五
	三丙寅						七二六
	四丁卯						七二七
	五戊辰						七二八
	天平 己巳	白銅柄香爐具箱銘		正倉院	墨書。 神龜六年七月六日トアリ。		七二九
	三庚午						七三〇
	三辛未						七三一
	四壬申						七三二
	五癸酉						七三三
	六甲戌						七三四
	七乙亥						七三五

五 癸巳	六 甲午	七 乙未
聖武天皇銅板詔書		磁
正倉院		皿
		正倉院
銅板ノ両面ニ刻セラレタル文字ノ字跡ニ多大ノ相違アル事ヲ知リシヲ以テ改メテ此欄ニ記ス事トセリ。 銅板長一尺八分、廣六寸八分厚凡五厘(厚ハ余ノ目測)		黒書。 徑一尺四寸、高一寸九分 〔東瀛珠光〕 五(五)深凡一寸五分、 糸底徑凡八寸八分、厚凡二分、裏面ノ銘文如左 (中央) 戒堂院聖僧供養盤 (左右) 天平勝寶七歲七月廿一日 東大寺
七五三	七五四	七五五

稱徳		淳仁							天字	八
神護	天	八	七	六	五	四	三	二	寶	丙
乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	字	申
							子日手辛鋤			
							正倉院			
							墨書。文ニ曰ク 東大寺 子日獻 天平寶字二年正月 二口アリ、内一口ハ模。			
七六六	七六五	七六四	七六三	七六二	七六一	七六〇	七五九	七五八	七五七	七五六

稱徳天皇神護景雲元年ヨリ
 後一條天皇長元八年マテ、
 削除ス

後冷泉					後朱雀						
二丁亥	永承丙戌	二乙酉	寛徳甲申	四癸未	三壬午	二辛巳	長久庚辰	三己卯	二戊寅	長暦丁丑	九丙子
					手向山神社舞樂皇仁底 面及地久面二面銘						
					奈良市雜司町						
					墨書。 三面共元東大寺藏。地久 面ノ一ニ應徳三年ノ修理 銘アリ。						
一〇四七	一〇四六	一〇四五	一〇四四	一〇四三	一〇四二	一〇四一	一〇四〇	一〇三九	一〇三八	一〇三七	一〇三六

三	二	康平	五	四	三	二	天喜	七	六	五	四	三
庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子
一〇六〇	一〇五九	一〇五八	一〇五七	一〇五六	一〇五五	一〇五四	一〇五三	一〇五二	一〇五一	一〇五〇	一〇四九	一〇四八

治曆	七	六	五	
乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	
				四辛丑 手向山神社三鼓胴
				奈良市雜司町
				墨書。 文ニ曰ク 康平肆季 <small>歲次</small> 參月 拾肆日 <small>辛丑</small> 別當法印 大和尚位權大僧都覺源 殊抽清淨之誠施入東 大之寺仙臺久翫不出 仁祠雅曲遙奏將期 佛會矣 高一尺四寸六分、徑八寸 二分。 尙永曆ノ修理銘アリ（永 曆二年ノ欄參照）
				一〇六一
				一〇六二
				一〇六三
				一〇六四
				一〇六五

堀河												
四	三	二	寛治	三	二	應德	三	二	永保	四	三	二
					乙丑	甲子	癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午
一〇九〇	一〇八九	一〇八八	一〇八七	一〇八六	一〇八五	一〇八四	一〇八三	一〇八二	一〇八一	一〇八〇	一〇七九	一〇七八

白河											後三條			
承曆	三	二	承保	五	四	三	二	延久	四	三	二			
丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午			
								法隆寺繪殿聖德太子座 像牀内銘						
								生駒郡法隆寺村						
								【墨書】 【法隆寺大鏡】第二十二卷 参照						
一〇七七	一〇七六	一〇七五	一〇七四	一〇七三	一〇七二	一〇七一	一〇七〇	一〇六九	一〇六八	一〇六七	一〇六六			

鳥羽

三乙未	二甲午	永久癸巳	三壬辰	三辛卯	天永庚寅	二己丑	天仁戊子	二丁亥	嘉承丙戌	二乙酉	長治甲申	五癸未
一一一五	一一一四	一一一三	一一一二	一一一一	一一一〇	一一〇九	一一〇八	一一〇七	一一〇六	一一〇五	一一〇四	一一〇三

四壬午	三辛巳	二庚辰	康和己卯	二戊寅	承德	永長	二	嘉保	七	六	五
法隆寺觀世音面銘											藥師寺吉祥天銘
生駒郡法隆寺村											生駒郡都跡村西ノ京
墨書。 「康和四年十月九日」トアリ											墨書。 「寛治五年辛未十二月十五日」トアリ
一一〇二	一一〇一	一一〇〇	一〇九九	一〇九八	一〇九七	一〇九六	一〇九五	一〇九四	一〇九三	一〇九二	一〇九一

崇德											
二丁未	大治丙午	二乙巳	天治甲辰	四癸卯	三壬寅	二辛丑	保安庚子	二己亥	元永戊戌	五丁酉	四丙申
刻銘。 文ニ曰ク											
一一二七	一一二六	一一二五	一一二四	一一二三	一一二二	一一二一	一一二〇	一一一九	一一一八	一一一七	一一一六

天承辛亥	五庚戌	四己酉	
			三戊申 吉水神社 筥
			吉野郡吉野山
			<p>勝手宮神 大治三年八月十二日井樹院 内別處 <small>(圖)</small> 前住僧慶俊作也 <small>ト「工」ニ記セリ。文字ノ存スル所長一尺一寸、總高一尺七寸六分、飽徑二寸三分五厘。 外ニ「美」「乞」「凡」「上」ニ左ノ文字ヲ刻セリ</small></p> <p>美。勝手宮。 乞。勝手宮。 凡。勝手宮神。 上。勝手。</p> <p>此筥今吉水神社ノ寶物ナリ。</p>
一一三一	一一三〇	一一二九	一一二八

		近衛										
長承	壬子	東大寺法華堂柱刻文	奈良市雜司町	「長承元年十一月廿八日」トアリ。	一一三二							
二	癸丑				一一三三							
三	甲寅	東大寺 鉦 鼓	奈良市雜司町	「長承三年三月十一日」トアリ。	一一三四							
保延	乙卯	東大寺法華堂柱刻文	同 所	「保延元年八月廿三日」トアリ。	一一三五							
二	丙辰				一一三六							
三	丁巳				一一三七							
四	戊午				一一三八							
五	己未				一一三九							
六	庚申				一一四〇							
永治	辛酉				一一四一							
康治	壬戌				一一四二							
二	癸亥				一一四三							
天養	甲子	法隆寺還城樂及板頭面	生駒郡法隆寺村	「漆書。還城樂面 天養元年十月」	一一四四							

後白河													
久安	乙丑											日法隆寺卅之内」トアリ。	一一四五
二	丙寅												一一四六
三	丁卯												一一四七
四	戊辰												一一四八
五	己巳	東大寺法華堂柱刻文	奈良市雜司町	「久安五年四月十四日」トアリ。	一一四九								
六	庚午												一一五〇
仁平	辛未	東大寺法華堂柱刻文	奈良市雜司町	「仁平元年十二月三十日」トアリ。	一一五一								
二	壬申												一一五二
三	癸酉												一一五三
久壽	甲戌												一一五四
二	乙亥												一一五五
保元	丙子												一一五六

高倉		六條						
嘉應 己丑	三 戊子	二 丁亥	仁安 丙戌	永萬 乙酉	二 甲申	長寬 癸未	二 壬午	應保 辛巳
					成身院梵鐘			手向山神社三鼓洞
					神戸市中山手通八丁目徳照寺			奈良市雜司町
					陽鏡。 元添上郡東里村中川成身院ノ鐘ナリシガ、今徳照寺ノ有ニ歸セリ。銘ノ全文【攝河泉金石文】ニ載ス。大治四年ノモノハ既ニ亡ク、此鐘長寬二年ノ改鑄ナリ。			墨書。 文ニ曰ク 永曆二年三月修理之
一一六九	一一六八	一一六七	一一六六	一一六五	一一六四	一一六三	一一六二	一一六一

二條			
一 丁丑	三 戊寅	平治 己卯	永曆 庚辰
手向山神社舞樂菩薩面 (破片)	東大寺廣目天銘	東大寺法華堂柱刻文	東大寺廣目天牀內經卷 外箱
奈良市雜司町	同	同	同
刻銘。 「保元三年三月十一日」トアリ。	墨書。 右肩上膊トノ接續部ニ「平治元年□五月廿三日」トアリ。	「平治元年七月十四日」トアリ。	墨書。 箱大サ内法長一尺一寸三分、巾三寸九分六厘、深一寸七分。側板二分二厘、蓋厚二分、底板厚一分。檜製ニシテ内ニ經卷三卷ヲ收ム。 第十六版ノ一参照。
一一五七	一一五八	一一五九	一一六〇

安德												
壽永	養和	四	三	二	治承	二	安元	四	三	二	承安	二
壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅
		東大寺廣目天駄内銘										
		奈良市雜司町										
		墨書。 第十四版ノ二参照。										
一一八二	一一八一	一一八〇	一一七九	一一七八	一一七七	一一七六	一一七五	一一七四	一一七三	一一七二	一一七一	一一七〇

後鳥羽			
後鳥羽 元曆		後鳥羽 文治	
三	二	四	三
甲辰	乙巳	甲辰	乙巳
當麻寺金堂棟木添木銘	春日神社舞樂散手破陣 樂面	春日神社舞樂地久面	唐招提寺金堂千手觀音 修理銘
北葛城郡當麻村當麻	奈良市	同所	生駒郡都跡村五條
墨書。 「壽永參季 <small>歲次</small> 甲辰二月十九日 寅棟上云々」トアリ。現在 ノ金堂建築前ノ建物ノ棟 木一部ノ殘片ナルヘシ。	刻銘。 「以元興寺木模之、佛師定 慶、壽永三年二月」トア リ。	墨書。 「元曆二年乙巳二月日」ト アリ。	刻銘。 軸ニ「文治元年八月廿八 日開眼。法皇用之。天平 筆」ト三行ニ記セリ。
一一八四			一一八五

八丁巳	九戊午	正治己未	二庚申	建仁辛酉	二壬戌	三癸亥	元久甲子	二乙丑
					興福寺金堂内薬王薬上胎内鏡架銘	興福寺梵天牀内銘		
					奈良市	奈良市		
					墨書。 一ハ「建仁二年八月廿日」 一ハ「建仁二年九月六日」 トアリ。 第十六版ノ二参照。	墨書。 「建仁二年戊戌三月十日」トアリ。		
一一九七	一一九八	一一九九	一二〇〇	一二〇一	一二〇二	一二〇三	一二〇四	一二〇五

又治二丙午	三丁未	四戊申	五己酉	建久庚戌	二辛亥	三壬子	四癸丑	五甲寅	六乙卯	七丙辰
	東大寺重源脇息								興福寺一切經版木	興福寺維摩居士座像胎内銘
	奈良市雜司町								奈良市	同所
	刻銘。 「文治三年戊申九月二日」トアリ。								刻銘。	墨書。 「建久七年丙七月申五日壬午云々」トアリ。
一一八六	一一八七	一一八八	一一八九	一二九〇	一二九一	一二九二	一二九三	一二九四	一二九五	一二九六

仲恭 後堀河									
嘉祿	元仁	二	貞應	三	承久	六	五	四	三
乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥
吉野水分神社三十八所 神及小守神銘								圓成寺持國天臺座銘	興福寺龍燈鬼牀內銘
吉野郡吉野村子守								添上郡大柳生村忍辱山	奈良市
墨書。 第十四版ノ六參照。								墨書。 「建保四年四月四日云々」 トアリ。	墨書。 「建保三卯月二十六日法 橋康辨」トアリ。
一一三三	一一三四	一一三三	一一三二	一一三一	一一三〇	一一二九	一一二八	一一二七	一一二五

順德									
建永	承元	建曆	建保	二	三	二	承元	建永	
丙寅	丁卯	辛未	癸酉	壬申	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	
	興福寺十二神將ノ内波 夷羅像牀内銘						唐招提寺鞆鼓銘		
	奈良市						生駒郡都跡村五條		
	墨書。 「建永二年四月廿九日」ト アリ。						刻銘。 洞ノミ殘存セリ。		
一一〇六							朱書。 「承元元年十一月十五日」 トアリ。		
	一一〇七								
	一一〇八								
	一一〇九								
	一一一〇								
	一一一一								
	一一一二								
	一一一三								
	一一一四								

仁治	延應	曆仁	三	二	嘉禎	文曆
庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午
春日神社廢安居屋柱						
奈良市						
刻銘。 上部ニ田地四段ノ寄進文ヲ記シ下部ニ仁治元年庚子十一月廿七日寺僧理玄藤原姉子同仲子						二寸五分、總高一尺八寸二分。寬永七年十月十六日壽命院(廢妙樂寺ノ塔頭ニシテ址談山神社西門ノ左方四)法印良藝ノ寄進セシモノナリ。
一一四〇	一一三九	一一三八	一一三七	一一三六	一一三五	一一三四

天福	四條	貞永	三	二	寬喜	二	安貞	二
癸巳		壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌
談山神社二帶筵	銘	法隆寺金堂内東端天蓋						
磯城郡多武峰村多武峰(奈良帝室博物館出陳)		生駒郡法隆寺村						
刻銘。 文ニ曰ク 天福元年癸巳六月下旬之比作之 信貴山僧行圓 ト凡竹ニ記セリ。文字ノ存スル所長四寸一分、凡竹長一尺五寸四分、龜徑		墨書。						
一一三三		一一三二	一一三一	一一三〇	一二二九	一二二八	一二二七	一二二六

後醍醐			
	三	二	
	壬寅	辛丑	
當麻寺曼荼羅堂佛壇銘		唐招提寺鼓樓棟木銘	
北葛城郡當麻村當麻		生駒郡都跡村五條	
螺鈿銘。 第十一版ノ二参照。		トアリ。 方柱面取、柱巾三寸、面巾八分、文字ノ存スル所長四尺四寸五分。 墨書。 第十二版ノ一参照。	
刻銘。 元春日神社若宮社ノ所藏ニシテ、明治維新ノ際西大寺ノ僧某ノ有ニ歸セシガ、某死亡後現執事佐伯悟龍ニ傳ハリシヲ大正五年十二月東京市ノ住人根津嘉一郎ニ賣却セシトイフ。 厨子ハ總黒漆塗、正面ヲ縦ニ中央ヨリ左右ニ區劃シ、各兩開扉ヲ附セリ、扉ノ内側及屋蓋裏ニ銘文ヲ陰刻セリ。			
	一三四二	一三四一	

寛元癸卯			
大般若波羅密多經厨子			
東京市根津嘉一郎藏			
般若經六百卷ハ六十ノ引出シニ各十卷ツ、ヲ納メタル内五十餘卷ハ既ニ亡失セリト云フ、今佐伯師五卷ヲ藏セルガ、各卷終リニ淨阿尼自筆ノ墨書アリ、參考ノ爲メ左ニ掲グ第二卷。 寛喜元年四月十八日書寫了 尼淨阿 一校了重交了			
第一卷。 貞永元年五月廿八日書寫了 尼淨阿 第五百七十八卷。 仁治三年五月廿日書寫了 尼淨阿 一校了重交了			
第五百八十九卷。 仁治三年六月廿一日書寫了			
	一三四三		

後深草			
寶治	四	三	二
丁未	丙午	乙巳	甲辰
			第六百卷。 仁治三年八月十三日於春日若宮御前書寫了 尼淨阿 一交了 一交了 第一卷ヲ缺ケルガ故ニ確言シ難キモ凡ソ寛喜元年ヨリ始メ仁治三年迄十四年ヲ費シ六百卷ヲ書寫シ其翌年即チ寛元元年ニ至リ厨子ヲ造リ其内ニ收メ春日若宮ヘ淨阿尼ノ寄進セシモノナリ。 第十九、第二十版参照。
一二四七	一二四六	一二四五	一二四四

三〇

二	正	康	七	六	五	四	三	二	建	二
戊午	嘉丁巳	元丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	長己酉	戊申
法隆寺綱封藏木造如意輪觀音蓮座銘				石			吉野水分神社玉依姬神像牀内銘			
				佛						
生駒郡法隆寺村				宇陀郡榛原町山邊			吉野郡吉野村子守			
墨書。 【法隆寺大鏡】第四集参照。				地藏。 第四回【奈良縣史蹟勝地調査會報告書】第二十九頁参照。			墨書。 【建長三年歲次十月十六日】トアリ。			
一二五八	一二五七	一二五六	一二五五	一二五四	一二五三	一二五二	一二五一	一二五〇	一二四九	一二四八

三一

正元	己未	東大寺舞樂羅陵王而銘	白毫寺木造太山王座像 跡内銘。	添上郡東市村白毫寺	墨書。 「正元元年己三月」トアリ。	一二五九
文應	庚申	奈良市雜司町			漆書。 「正元元年四月廿二日」トアリ。	一二六〇
弘長	辛酉	奈良市中院町				一二六一
二壬戌						一二六二
三癸亥						一二六三
文永	甲子	極樂院本堂柱銘			刻銘。 本堂内陣東北隅柱頭ニ近ク。 沽却 家地新訴券文事ト題シ 文永二年乙丑三月廿二日ニ成レル銘文ヲ刻セリ。	一二六四
二乙丑						一二六五

三丙寅	談山神社石佛	磯城郡多武峰村多武峰	談山神社西門ニ近ク建テルモノニシテ「文永三年八月八日奉造立」ノ刻銘アリ。 高麗傳來ノ石像ニシテ元ト飛鳥法興寺ノ東金堂ニ安置セシヲ康應二年此所ニ移シタリト傳フルモノ。	一二六六
四丁卯	當麻寺金堂柱銘	北葛城郡當麻村當麻	墨書。 内陣柱ニ「奉施入 當麻寺金堂長日講供養法析田事」ト題シ願文ヲ書シタルモノ。文字高ク存セリ。	一二六七
五戊辰	東大寺廣目天跡内支木銘 法隆寺食堂藥師厨子銘	奈良市雜司町 生駒郡法隆寺村	墨書。 第十四版ノ二参照。 「文永五年戊辰十二月日云々」トアリ。	一二六八
			刻銘。 文ニ曰ク 文永第五之曆亥冬初月	

六己巳	舞 樂 笙	奈良市水谷川男爵藏	之天造畢 駕 信貴山 阿闍梨賴尊于時行年八 十三 ト「凡」ニ記セリ。文字ノ 存スル所長八寸六分、凡 竹長一尺四寸九分、匏徑 二寸二分五厘、總高一尺 七寸四分。	一二六九
七庚午	西大寺舍利塔	生駒郡伏見村西大寺	金銅寶塔。 塔ハ四方ニ階チ有セル方 形ノ壇上ニ建ツ、各部ノ 寸法左ノ如シ(單位尺) 壇方 一、〇六 塔身高 一、〇七 塔首高 一、〇三 同首徑 一、〇三 軒口長 一、〇三 相輪高 一、〇三 總高自壇頂上 一、〇六 壇ノ裏面及其四方ニ銘文 人名等ヲ刻セリ。 第一版參照。	一二七〇

後宇多	八辛未	九壬申	一〇癸酉	一一甲戌	建治乙亥	二丙子	三丁丑	弘安戊寅
圓成寺木造虛瀧和上躰 内銘	東大寺廣目天右肩銘	同	同	同	同	同	同	同
添上郡大柳生村忍辱 山	奈良市雜司町	所	所	所	所	所	所	所
墨書。 第十四版ノ三參照。	色彩書。 右肩ト右手ト上膊トノ接 續面ニ白線ノ如キ色ニテ 「文永九年五月(以下不 明)」トアリ。	墨書。 「文永九年五月廿七日」 トアリ。	墨書。 第十四版ノ五參照。	墨書。 第十四版ノ五參照。	墨書。 第十四版ノ五參照。	墨書。 第十四版ノ五參照。	墨書。 第十四版ノ五參照。	墨書。 第十四版ノ五參照。
一二七一	一二七二	一二七三	一二七四	一二七五	一二七六	一二七七	一二七八	一二七九

二己卯	三庚辰	四辛巳	五壬午	六癸未
靈山寺本堂棟札 法隆寺西圓堂本尊背光 銘	生駒郡富雄村中 生駒郡法隆寺村	墨書。 第十版ノ一参照。	墨書。 第十版ノ一参照。	法隆寺五重塔護札
一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三

七甲申	八乙酉	九丙戌	一〇丁亥	伏見
法隆寺新堂棟札 法隆寺新堂藥師脇士日 光月光臺座銘。	藥師寺東院堂棟札 興福寺四天王ノ内多聞 增長二天修理銘。	法隆寺聖德太子十七條 憲法版本	唐招提寺講堂木造彌勒 座像牀内銘。	
生駒郡法隆寺村	同	生駒郡法隆寺村	生駒郡都跡村五條	
墨書。 第十版ノ二参照。	墨書。 第十版ノ三参照。	刻銘。 【法隆寺大鏡】第三十二集 参照。	墨書。 第十四版ノ四及ヒ第八版 参照。	
一八四	一八五	一八六	一八七	

墨書。各重ノ四面通肘木ノ面ニ雷避ケノ爲メニ打チツケアル木札ニシテ表面ニ梵字ヲ書シ裏面ニ其漢譯ヲ記シタルモノニシテ興正菩薩ノ筆ナリ。文字左ノ如シ。東、阿揭多。西、主多允。南、設叛嚕。北、蘇多未尼。札長二尺八寸、巾九寸三分、厚九分。檜製。第十六版ノ三参照。

二己丑	三庚寅	四辛卯	五壬辰	永仁癸巳	二甲午	三乙未	四丙申	五丁酉
秋篠寺梵天首真木銘	海龍王寺舍利塔					休岡八幡神社諸神像板額		海龍王寺五重小塔臺座銘
生駒郡伏見村秋篠	添上郡佐保村法華寺					生駒郡都跡村西ノ京藥師寺		添上郡佐保村法華寺奈良帝室博物館出陳
墨書。 「正應二年七月二十五日」トアリ。						朱漆書。 「永仁三年三月廿一日」トアリ。		墨書。 永仁五年丁酉九月廿日修理之 大工季國 奉行僧玄智 トアリ。
一二八九	一二九〇	一二九一	一二九二	一二九三	一二九四	一二九五	一二九六	一二九七

正應戊子		石● 塔● 臺● 石●
興福寺密迹力士足部銘	興福寺廣西金堂二王牀内銘。	奈良市高畑町
同所	奈良市	
墨書。 「正應元年戊子十月十日了修覆西金堂力士」トアリ。	墨書。 第十五版ノ一参照。	石ノ大サ約方二尺五寸五分、高一尺三四寸、中央ヨリ水平ニ二三寸割リニ跡ヲ存ス、元ト南葛城郡御所町ノ西南七八町ノ所ニ在リシトイフ。 銘文左ノ如シ
		（南面） 平衆法佛 等生界□陀 之造[?]□利 矣立□□益
		（北面） 月十戊元正 十□子年應 （東面） 尼宗沙右三 阿佛琳ひ日
		一二八八

		花園	
二己酉	延慶戊申	東大寺二月堂鐘	二丁未 蓮・臺・寺・石・塔
	吉水院太鼓	奈良市雜司町	磯城郡香久山村吉備
	吉野郡吉野山		徳治二年 _{丁未} 卯月八日 願主當(以下磨滅) 火輪ノ西南角缺損セル外 完存ス。
一三〇九	一三〇八	沙彌(花押)筒工皮	徳治二年 _{丁未} 卯月八日 願主當(以下磨滅) 火輪ノ西南角缺損セル外 完存ス。

						後二條		後伏見	
徳治丙午	三乙巳	二甲辰	嘉元癸卯	乾元壬寅	三辛丑	二庚子	正安己亥	六戊戌	
	大神神社楯		常麻寺講堂棟木銘						
	磯城郡三輪町		北葛城郡常麻村常麻						
	五輪塔。 高約七尺、本堂ノ東南隅ニ建テリ。 地輪ノ銘ニ曰ク		墨書。 「乾元二年 _{歲次癸卯} 四月二十二日云々」トアリ。						
一三〇六	一三〇五	一三〇四	一三〇三	一三〇二	一三〇一	一三〇〇	一二九九	一二九八	

五丙辰	四乙卯	三甲寅	二癸丑	正和壬子	應長辛亥	三庚戌
	高山水船	西大寺金剛盤 唐招提寺佛像蓮座蓮肉 殘闕				
	奈良公園高山神社附近	生駒郡都跡村五條				
	刻銘。 第四回「奈良縣史蹟勝地調査報告書」第二十五頁參照。	墨書。 徑六寸八分厚八分杉材、蓮肉ノ殘闕ニシテ表面ニ武者ヲ描キ裏面ニ「正和三年五月□□」トアリ。				
一三一六	一三一五	一三二四	一三二三	一三二二	一三一一	一三〇〇

		後醍醐		文保丁巳
元亨辛酉	二庚申	元應己未	二戊午	文保丁巳
唐招提寺舍利殿舍利寶座銘	宇陀水分神社本殿棟木銘	石・佛		唐招提寺鐘樓文殊厨子臺座銘
生駒郡都跡村五條	宇陀郡宇太村古市場	添上郡柳生村柳生小字中村		生駒郡都跡村五條
刻銘。 高二尺四寸、龍頭高五寸七分、口徑一尺七寸六分	墨書。 第十三版參照。	地藏。 元應元年己十一月トアリ(拓影ニ據ル)「正長元年」ノ別銘アリ。		墨書。 「文保元年二月十九日云々」トアリ。
	一三二一	一三一九	一三一八	一三一七

元弘	二庚午	元德	三戊辰	二丁卯	嘉曆	二乙丑	正中
辛未		己巳			丙寅		甲子
石					當麻寺金堂棟木銘 法隆寺西圓堂悔過板銘		
佛					北葛城郡當麻村當麻 生駒郡法隆寺村		
添上郡田原村南田原							
彌陀。刻銘。 【第四回奈良縣史蹟勝地 調査會報告書】第五十三 頁參照。					墨書。 「正中三年丙卯月廿六日 云々」トアリ		
二三二一	一三三〇	一三二九	一三二八	一三二七	一三二六	一三二五	一三二四

三癸亥	二壬戌
	寶泉寺梵鐘
	吉野郡上北山村西原
	<p>（此寸法ハ寺僧ノ記載ニ據リタルモノ故多少ノ誤リナキヲ保セズ） 文ニ曰ク 和泉國大鳥郡草部 郷下條土生村善福寺 鐘矣 元亨二年壬戌十月廿二日 勸進聖定學一貫七百 大檀那大區國貳拾貫 安部先正六貫文 沙弥淨觀三貫文 沙弥淨佛一貫文</p> <p>此鐘余未ダ實見セズ、銘文ハ粗雜ナル摺影ニヨリテ記シタルヲ以テ第三欄第一行ノ第五字判然セザルハ遺憾ナリ。 鑄鐘ニツキ寄附者ノ姓名及金額ヲ記セシハ大阪府南河内郡道明寺ノ鐘ト共ニ珍トスルニ足ル。</p>
一三二三	一三二二

(崇光)			
(四)	三	戊子	
法隆寺東院舍利殿舍利塔臺座(蓮花)銘	石●	佛●	石●
生駒郡法隆寺村	添上郡東山村の野	磯城郡城島村粟殿、極樂寺墓地	塔●
刻銘。【法隆寺大鏡】第三十七集参照。	地藏の野八幡神社ノ南敷町路傍ノ自然石ニ刻セリ。	五輪塔。高約七尺許、墓地ノ中央ニ在リ、土塀ヲ繞ラス、地輪東面ニ銘文ヲ刻セルモ文字甚ダシク磨滅セリ文ニ曰ク 右相□□□□ 並三區平醫王丸 一百ヶ日過□□□□ 國修匠善造立如件 正平三年戊子正月五日 願主尼良妙 俚俗芝村織田藩祖土屋肥後守ノ墓ト傳フ。	一三四八

(三)	二	(二)	正平	(貞和)	六	(三)	五	(二)	四	(康永)
丁亥		丙戌		乙酉		甲申		癸未		
				法隆寺上宮王院羅太鼓 銅銘						
				生駒郡法隆寺村						
				墨書。 康永四年ノモノ 【法隆寺大鏡】第二十三集参照。						
一三四七		一三四六		一三四五		一三四四		一三四三		

一六	(五) 一五	(四) 一四	(三) 一三	(二) 一二	(延文) 一一	(四) 一〇
辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未
						法隆寺上御堂四天王首 銘
						生駒郡法隆寺村
						墨書。 四跡共其首部ニ銘文アリ
一三六一	一三六〇	一三五九	一三五八	一三五七	一三五六	一三五五

(後光嚴)

(三) 九	(二) 八	(文和) 七	(二) 六	(觀應) 五	(五) 四
甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑
	上水屋水船	興福寺金銅舍利塔銘	來迎寺石塔		
	奈良公園花山	奈良市	山邊郡都介野村來迎寺		
	【奈良縣史蹟勝地調査會報告書】第四回參照。	刻銘。 元河内泉福寺藏。	五輪塔。		
一三五四	一三五三	一三五二	一三五二	一三五〇	一三四九

		後圓融		長慶							
(五)	文中	(四)	二	(三)	建德	(二)	二四	(應安)	二三	(六)	二二
壬子		辛亥		庚戌		己酉		戊申		丁未	
法隆寺地藏堂棟木銘				法隆寺上堂天井支輪裏板銘(二枚)							
生駒郡法隆寺村				生駒郡法隆寺村							
墨書。 文字磨滅多ク全文ヲ讀ム				墨書。 庚應安三年卯月廿日 トアリ。							
一三七二		一三七一		一三七〇		一三六九		一三六八		一三六七	

(五)	二二	(四)	二〇	(三)	一九	(二)	一八	(貞治)	一七	(康安)
丙午		乙己		甲辰		癸卯		壬寅		
		法隆寺東院舍利殿厨子天井銘。						興福寺一切經版木銘		
		生駒郡法隆寺村								
		墨書。 【法隆寺大鏡】第三十七集 参照。						刻銘。 「康安二年七月四日」トアリ。		
一三六六		一三六五		一三六四		一三六三		一三六二		

後龜山	二	(六)	三	(七)	天授	(永和)
	癸丑	甲寅	乙卯			
	東大寺制多迦童子足部 銘		東大谷日女神社石燈			
	奈良市		磯城郡安倍村山田			
ヲ得ス。 第十二版ノ二参照。	墨書。 右足柄ニ左ノ銘アリ。 「應安六癸九月十九日事 始同之十月十九日緑色立」		此石燈ハ既ニ「奈良縣金石年表」ニ載セ、其詳細ハ第三回「奈良縣史蹟勝地調査會報告書」第七十七頁ニ記シアルモ銘文ニ多大ノ誤讀アルヲ以テ再ビ茲ニ採録シ銘ノ全文ノ拓影ヲ第四版ニ掲グ。			
	一三七三	一三七四	一三七五			

康曆	五	(四)	四	(三)	三	(二)	(一)
己未		戊午		丁巳		丙辰	
吉野山口神社湯釜						法隆寺新堂懸佛	法隆寺護摩堂木彫弘法大師銘
吉野郡吉野村吉野山						生駒郡法隆寺村	生駒郡法隆寺村
陽銘。 口徑内法一尺五寸四分、深二尺二寸五分、三脚アリ、總高二尺四寸二分、縁ノ側面ニケ所ニ左ノ銘アリ。						墨書。 【法隆寺大鏡】第十四集参照。	墨書。 應安八年卯三月日 トアリ。
一三七九		一三七八		一三七七		一三七六	

五	(嘉慶)	四	(三)	三	(二)	二	(至德)	元中	(一)
戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子	癸亥				
					法隆寺金堂鱗口				
					生駒郡法隆寺村				
					一面ニ 永徳三年癸卯 二月十八日 他面ニ 法隆寺 藤原頼義 御舍利堂 藤原氏女				
一三八八	一三八七	一三八六	一三八五	一三八四	一三八三				

後小松		(二)	二	(永徳)	弘和	(一)	六
		壬戌	辛酉	庚申			
				法隆寺護摩堂矜羯羅童子銘			
				生駒郡法隆寺村			
				墨書。 「康暦二年庚申卯月二十三日」トアリ。			
				刻銘。 徑九寸、厚三寸八分、銘文左ノ如シ			
		一三八二	一三八一	一三八〇			

金峯山下御湯釜也
康暦元年己未□□月日
□□□□□□
元號干支ノ判讀頗ル困難ナリ。

應永	明德四	(三)	九	(二)	八	(明德)	七	(康應)	六	(二)
甲戌	癸酉	壬申		辛未		庚午		己巳		
		石上神宮五部大乘經箱 (唐櫃)								
		山邊郡丹波市町布留								
		墨書。 明德三年壬申十一月二十 一日願主比丘清透 トアリ。								
一三九四	一三九三	一三九二		一三九一		一三九〇		一三八九		

後小松

一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二
甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥
			唐招提寺律宗新學作持 要文判木					天皇神社棟札	唐招提寺菩薩戒通別二 受鈔判木
			生駒郡都跡村五條					山邊郡二階堂村備前	生駒郡都跡村五條
			應永八年辛巳二月日 南都唐提寺住侶釋賢盛謹 誌 北洛小比丘慈純書 トアリ					墨書。 第十版ノ四参照。	應永二年乙亥九月四日 和州唐招提寺住侶小忍賢盛 謹誌 トアリ。
一四〇四	一四〇三	一四〇二	一四〇一	一四〇〇	一三九九	一三九八	一三九七	一三九六	一三九五

二四丁酉									
二五戊戌	十輪院境内不動堂廻口	奈良市十輪院町	刻銘。 徑 厚 文ニ曰ク 奉鑄廻口西粟倉郷之極 樂寺常住也 應永廿五年戊戌二月十八日願主敬白 美作國英田郡ニ東粟倉村西粟倉村アリ、西粟倉郷或ハ此カ、大和ニハカ、ル地名無シ。						一四二七
二六己亥									一四二九
二七庚子									一四二〇
二八辛丑									一四二一
二九壬寅	德融寺石塔	奈良市鳴川町	五輪塔(水輪以上缺)。 地輪中央ニ梵字、其左右						一四二二

三〇癸卯	唐招提寺千手觀音厨子 屋根異銘	生駒郡都跡村五條	ニ「應永三十年八月廿八日」トアリ。 墨書。 「應永卅年癸卯二月廿七日造立云々」トアリ。						一四二三
三一甲辰									一四二四
三二乙巳									一四二五
三三丙午	注隆寺上堂山面入口上 欄間菱格子柵銘	生駒郡法隆寺村	墨書。 第十五版ノニ參照。						一四二六
三四丁未									一四二七
正長戊申	圓成寺本堂禮盤	添上郡大柳生村忍辱山	墨書。 「于時正長元年申六月六日改之」トアリ。						一四二八
永享己酉									一四二九
二庚戌	眞言院石塔	奈良市東大寺境内	五輪塔(人名磨滅)。 朱漆書。						一四三〇
三辛亥	達磨寺達磨座像銘	北葛城郡王寺村王寺	第十四版ノ五參照。						一四三一

後花園

嘉吉 辛酉	一二 庚申	一一 己未	一〇 戊午	九 丁巳	八 丙辰	七 乙卯	六 甲寅	五 癸丑	四 壬子
唐招提寺舍利殿舍利寶座及釋迦壇修補銘	海龍王寺愛染明王臺座銘		法隆寺南大門棟木銘	法隆寺繪殿南及北流西側降鬼	法隆寺傳法堂大棟西側鬼				
生駒郡都跡村五條	添上郡佐保村法華寺		同	同	生駒郡法隆寺村				
墨書。第十三版參照。	墨書。「永享十二年庚申六月一日椿井丹波公作」トアリ		墨書。【法隆寺大鏡】第三十五集參照。	刻銘。同上參照。	刻銘。【考古學雜誌】第七卷第六號參照。				
一四四一	一四四〇	一四三九	一四三八	一四三七	一四三六	一四三五	一四三四	一四三三	一四三二

三 丙寅	二 乙丑	文安 甲子	三 癸亥	二 壬戌
法隆寺傳法堂鬼、平、及圓瓦		法隆寺舍利殿鰐口	瑞花院本堂棟木銘	法隆寺傳法堂平瓦
生駒郡法隆寺村		生駒郡法隆寺村	磯城郡平野村飯高 <small>ヒナカ</small>	生駒郡法隆寺村
刻銘。第六版及【考古學雜誌】第七卷第六號參照。		其左右ニ 妙樂寺 文安元年甲子十二月日 備前	墨書。第十二版ノ三參照。	刻銘。第五版及【考古學雜誌】第七卷第六號參照。
一四四六	一四四五	一四四四	一四四三	一四四二

二 辛 未	二 庚 午	寶 德 己 巳 石	五 戊 辰	四 丁 卯
		塔	法隆寺西院步廊平瓦	
		吉野郡上市町	生駒郡法隆寺村	
		爲淨源□□ 梵字(ア) 寶德元年五月 (今井文英氏ニ據ル)	刻銘。 文安五年辰 トアリ。	
一 四 五 一	一 四 五 〇	一 四 四 九	一 四 四 八	一 四 四 七

三 甲 戌	二 癸 酉	享 德 壬 申	興福寺一切經版木銘	一 四 五 二
長福寺棟札	法隆寺舍利殿經箱	奈良市	刻銘。 寶德四年五月日トアリ。	一 四 五 三
生駒郡北生駒村俵口	生駒郡法隆寺村		朱書。 今寶藏内ニ在リ。内法巾 四寸、長同一尺一寸、深 同一寸九分七厘、總高四 寸六分五厘總墨漆塗ニシ テ底板ニ左ノ文ヲ朱漆ニ テ書セリ 法隆寺 御舍利殿□箱 其下ニ二行ニ 享德三 戌五月日 奉行實俊大法師	一 四 五 四
墨書。 札長二尺一寸九分、巾五 寸一分五厘、厚六分檜製。				

康正乙亥	西大寺天目盆	法隆寺上宮王院樹	二甲子
生駒郡伏見村西大寺	生駒郡法隆寺村	生駒郡平群村榎原	金勝寺石佛
黑漆書。 經一尺五寸九分、高三寸七分五厘、底經一尺三寸七分、朱漆塗。 底ノ文字左ノ如シ 享德四乙亥正月日 西大寺沙彌方天目盆 沙彌知事實明房	刻銘。 今法隆寺綱封藏ニ在リ。第十一版ノ四參照。	境内池畔ノ岩面チ、高二尺八寸、巾二尺、深平均五寸ノ背光 <small>(丹後)</small> 型ニ鑿リ四メ、高二尺三寸ノ地藏立像ヲ陽刻シ、其左右ニ文字ヲ刻セリ、右側ノモノ左ノ如シ 康正二甲子六月日……	一四五五

長祿丁丑	都 <small>ツ</small> 水 <small>ミ</small> 分 <small>ク</small> 神社御靈舎裏面銘	二戊寅	三己卯	寬正庚辰
山邊郡都介野村友田	生駒郡法隆寺村	法隆寺東院步廊西門降棟鬼三個	法隆寺塔頭寶珠院木造五髻文殊蓮座銘	
黑書。 文ニ曰ク 康正三年丁九月廿五日造立之 神主 長谷寺 僧 小法師 神主 代 重實 左衛門太郎 三郎四郎 衛門五郎 太郎三郎 太郎四郎 太郎 次郎 三郎 太郎	刻銘。 【考古學雜誌】第七卷第六號參照。	同	所	一四五七
				一四五八
				一四五九
				一四六〇

御後
門土

文正 丙戌	六乙 酉	五甲 申	四癸 未	三壬 午	二辛 巳
			唐招提寺舍利殿舍利臺 裏面銘	室生寺法海碑	
			生駒郡都跡村五條	宇陀郡室生村室生	
			朱漆書。 應仁元年亥十一月日 トアリ。	五輪塔。 地輪中央ニ「第九長老法 海國師」、其左右ニ「寛正 三年十一月八日」ト刻セ リ。	
一四六六	一四六五	一四六四	一四六三	一四六二	一四六一

八丙 申	七乙 未	六甲 午	五癸 巳	四壬 辰	三辛 卯	二庚 寅	文明 己丑	二戊 子	應仁 丁亥
來迎寺 西碑				御靈神社本殿棟木銘				圓成寺樓門椽板	春日神社折敷
山邊郡都介野村來迎寺				宇智郡牧野村中之				添上郡大柳生村忍辱	奈良市
五輪塔。				墨書。 第十二版ノ四参照。				墨書。 樓門ノ修理ニ從事セシ工 人ノ戲書ナリ。	朱漆書。 應仁元年亥十一月日 トアリ。
一四七六	一四七五	一四七四	一四七三	一四七二	一四七一	一四七〇	一四六九	一四六八	一四六七

一二庚子	一〇戊戌	九丁酉
法隆寺食堂鱒口	普賢寺棟札 廢眉間寺磐臺	唐招提寺講堂圓瓦
生駒郡法隆寺村	高市郡今井町小綱 生駒郡都跡村五條唐 招提寺開山堂	生駒郡都跡村五條
刻銘。 徑九寸、厚二寸五分。銘 文左ノ如シ 中央上部ニ横ニ左ヨリ右 ニ 敬白 其左右ニ 播磨安栗郡安志庄之内 野村實布禰社 于時文明 _亥 八月十日祈 念諸願成就 文字磨滅甚メシク判讀頗 ル困難ナリ。	朱漆書。 眉間寺今廢ス、址添上郡 佐保村ニ在リ。 第十六版ノ五參照。	刻銘。 【考古學雜誌】第七卷第六 號參照。
一四八〇	一四七八	一四七七

一三辛丑	一四壬寅	一五癸卯	一六甲辰	一七乙巳	一八丙午	長享丁未	二戌申	延德己酉	二甲戌	三辛亥	明應壬子
				空海寺墓碑 來迎寺石銘						六字名號碑	
				奈良市雜司町 山邊郡都介野村來迎寺						吉野郡賀名生村	
				半截五輪(人名磨滅)。 五輪塔。							
一四八一	一四八二	一四八三	一四八四	一四八五	一四八六	一四八七	一四八八	一四八九	一四九〇	一四九一	一四九二

二 癸丑	三 甲寅	四 乙卯	五 丙辰
金峰神社中將及小面 面 <small>コオモテ</small>	圓成寺境内春日堂内 木片		世尊寺湯釜
吉野郡吉野 村吉野山吉 野山口神社	添上郡大柳生村忍辱 山		吉野郡大泥村比曾
刻銘。 二面共同一人ノ作ナリ、今其一 <small>(中將)</small> ヲ左ニ示ス 吉野カツテルセン キシツ サル ヒカキモト 七郎 作家信 <small>(花)</small> カク 三月 明應二年 ミツノトノ 吉日	墨書。 第十一版ノ三参照。	陽銘。 口徑内法八寸三分、深八 寸五分、縁ノ側面ニ左ノ 銘アリ 比曾現光寺 明應五年 丙辰九月八日 比曾寺一ニ現光寺、又吉 野寺トイフ、今世尊寺ト 稱ス。 第三版参照。	
一四九三	一四九四	一四九五	一四九六

六 丁巳	七 戊午	八 己未	九 庚申	後 柏 原
白毫寺木造閻魔座像 鉢内銘	同木造太山王鉢内銘			文龜 辛酉 當麻寺金堂柱銘
添上郡東市村白毫寺	同			北葛城郡當麻村當麻
墨書。 明應六年十一月十四日 トアリ。 奈良帝室博物館出陳。	墨書。 明應七 <small>戊</small> 年六月日 トアリ。 奈良帝室博物館出陳。			墨書。 文永五年ノ墨書ノ直上ニ 文龜元年 <small>辛酉</small> 六月十一日 □□□□心經十二日 大般若經一部十三日奉 □觀音尊像并千卷講 □□□□即□大兩降下 人□□□□畢 ト三行ニ記セリ。 外ニ柱ノ下部ニ近ク多ク ノ文字アルモ磨滅シテ殆 ンド讀ムベカラズ。
一四九七	一四九八	一四九九	一五〇〇	一五〇一

二 壬戌	三 癸亥	永正 甲子	二 乙丑	三 丙寅	四 丁卯	五 戊辰
慈明寺木造十一面觀音						談山神社銀盆香箱外箱
高市郡眞菅村慈明寺						磯城郡多武峰村多武峰
墨書。 【奈良縣高市郡史料】(三三)ニ「本尊長三尺五寸蓮座ノ銘文ニ文龜二壬戌年トアレドモ總丈至頂上佛頂上ハ佛牀ノ下部蓮座ニ接スル個所ニアリ。寶髮群青、玉眼水晶、口唇朱彩、全体紫色。第十五版ノ三参照。						墨書。
一五〇二	一五〇三	一五〇四	一五〇五	一五〇六	一五〇七	一五〇八

六 己巳	七 庚午	八 辛未	九 壬申	一〇 癸酉	一一 甲戌
					圓成寺本堂内祈禱札
					添上郡大柳生村忍辱山
					墨書。 札長三尺八寸五分、巾二寸七分、厚六分。中央ニ從永正十季癸酉至甲戌歲奉轉一切經律論藏皇風永扇佛日增輝者也内洲壽瑠書 ト書シ、其左右ニ小字ニテ 永正十一年甲戌 孟夏三寶吉日 トアリ。
一五〇九	一五一〇	一五一一	一五一二	一五一三	一五一四

一二乙亥		唐招提寺香爐箱	墨書。 【奈良縣金石年表】永正十二年ノ欄(八十)ニ掲ゲテハ誤リ。 第十五版ノ四参照。	一五二五
西大寺名合器	生駒郡伏見村西大寺	朱漆書。 經四寸五分、高一寸四分、糸底經二寸八分五厘(全部)外推黒、牡丹唐草ヲ刻セリ、蓋、身及糸底ニ左ノ文字ヲ書ス (蓋)。	奉施入覺雅 西大寺光明眞言名合器 永正十二年乙亥八月日 (身)。 奉寄進 西大寺光明眞言方 小年預覺雅 (糸底)。 光明眞言名合器	一五二五

一四丁丑		石● 佛●	刻銘。 文ニ曰ク 奉造立地藏菩薩逆修慶圓 永正十四年丁丑六月廿四日 今ハ鳴川ニ通セル道路ノ西側ニ南面シテ建テル小堂ノ本尊タリ、元ト廢ル川寺址ヨリ移セシモノト傳フ、【大和志】中川寺ノ條ニ「...有地藏石像勸曰永正十四年刻」トアルモノ即此ナルベシ。	一五二六
西大寺千體地藏厨子	生駒郡伏見村西大寺	朱漆書。 厨子高一尺三寸三分、内法高一尺一寸二分、同巾九寸五分、同奥行六寸、外部春慶塗、扉内面ニ精巧ナル繪アリ、内部中央ニ地藏立像ヲ置キ、其左ニ地蔵小地蔵一千牀ヲ置ク、厨子ノ裏面外側ニ左ノ文ヲ書セリ	朱漆書。 厨子高一尺三寸三分、内法高一尺一寸二分、同巾九寸五分、同奥行六寸、外部春慶塗、扉内面ニ精巧ナル繪アリ、内部中央ニ地藏立像ヲ置キ、其左ニ地蔵小地蔵一千牀ヲ置ク、厨子ノ裏面外側ニ左ノ文ヲ書セリ	一五二七

大永辛巳	一七庚辰	一六己卯	一五戊寅	
			唐招提寺 据箱	圓成寺境内春日白山堂 棟札
			生駒郡都跡村五條	添上郡大柳生村忍辱 山
			朱書。 【奈良縣金石年表】永正十五年ノ欄(六頁)ニ掲ケシハ誤リ。 第十五版ノ五參照。	一千鉢地藏菩薩 奉寄附四大寺石塔院本堂 右尊像者爲妙秀尊與五七日之 追修奉造畢處也 筒井 順興 千時永正十四曆丑潤十月五日 石塔院ハ西大寺ノ塔頭ナ リシガ今廢ス。
一五二二	一五二〇	一五一九	一五二八	

後奈良						
二壬午	三癸未	四甲申	五乙酉	六丙戌	七丁亥	享祿戊子
石佛	西方寺懷善碑		道光碑	東大寺法華堂水屋妻戸 銘		當麻寺曼荼羅堂曼荼羅 厨子格狹間裏板
添上郡大柳生村大慈 仙	奈良市油坂町	奈良市川上町伴墓	奈良市雜司町	北葛城郡當麻村當麻		
地藏。刻銘。 大永二年壬午十月十五日 妙善逆修 トアリ。	五輪塔。	半截五輪(空輪缺損)。 刻銘。 大永六年四月十三日 トアリ。	墨書。 大永八年戊子六月八日 トアリ。	漆書。 朱漆塗唐櫃ニシテ裏面中 央ニ「多武峰堂方中護法 善神御裝束笈」其左右ニ		
一五二二	一五二三	一五二四	一五二五	一五二六	一五二七	一五二八

	二 癸巳	天 文 壬 辰	四 辛 卯	三 庚 寅	二 己 丑
法隆寺東院舍利殿舍利塔臺銘				蓮・長・寺・妙・安・碑 石 佛	談山神社唐櫃
生駒郡法隆寺村				磯城郡多武峰村西口 奈良市油阪町	磯城郡多武峰村多武峰
墨書。				地蔵立像。 背光五輪(無輪廓)。 【奈良縣金石年表】文祿三年ノ欄(七頁)ニ掲グシハ誤リ。	「享祿二年巳」十月吉日、其下方ニ人名ヲ六行ニ書セルモ、年月日ノ外故意ニ削字セルヲ以テ五六ノ文字ハ判讀不能ナリ。櫃ノ内法長一尺三寸三分、巾九寸、總高一尺四分。
	一五三三	一五三二	一五三一	一五三〇	一五二九

	四 乙 未	三 甲 午
長谷寺塔頭月輪院花瓶		西大寺制札
磯城郡初瀬町		生駒郡 伏見村 西大寺
長谷寺御寶前施主小聖泉長 閏十月二十三日		墨書。 大サ長一尺二寸四分、巾九寸八分、厚四分五厘、檜製。 文ニ曰ク 禁制 一放火之事 一濫妨之事 一伐竹林并麻事 右堅可令停止畢雖爲寶來被官不可有混亂候若於違犯族者可處嚴科者也 天文三年五月 日 順興(花押)
刻銘。 口徑外法一尺三寸九分、底徑同一尺九分、高二尺五寸。文字左ノ如シ 天文五年丙申 長谷寺御寶前施主小聖泉長 閏十月二十三日		西大寺 井式外 青野
一五三八	一五三五	一五三六 一五三七

	二 癸巳	天 文 壬 辰	四 辛 卯	三 庚 寅	二 己 丑
法隆寺東院舍利殿舍利塔臺銘				蓮・長・寺・妙・安・碑 石 佛	談山神社唐櫃
生駒郡法隆寺村				奈良市油阪町	磯城郡多武峰村多武峰
墨書。				背光五輪(無輪廓)。 【奈良縣金石年表】文祿三年ノ欄(七頁)ニ掲グシハ誤リ。	「享祿二年巳」十月吉日、其下下方ニ人名ヲ六行ニ書セルモ、年月日ノ外故意ニ削字セルヲ以テ五六ノ文字ハ判讀不能ナリ。櫃ノ内法長一尺三寸三分、巾九寸、總高一尺四分。地藏立像。
	一五三三	一五三二	一五三一	一五三〇	一五二九

七 戊 戌	六 丁 酉	三 甲 午
興神寺舍利塔厨子臺座銘 春日神社舞樂鯉口貴徳面	奈良市	西大寺制札
奈良市	生駒郡伏見村西大寺	墨書。 大サ長一尺二寸四分、巾九寸八分、厚四分五厘、檜製。 文ニ曰ク 禁制 一放火之事 一濫妨之事 一伐竹林并麻事 右堅可令停止畢雖爲寶來被官不可有
朱漆書。 第十六版ノ六參照。 刻銘。 興福寺 天文六丁酉四月十九日トアリ。		西大寺并式外青野
一五三八	一五三七	一五三四

一五丙午	一四乙巳	一三甲辰	一二癸卯	一一壬寅	一〇辛丑	九庚子	八己亥
藥師寺金伏樹	六字名號碑	福地院尋圓逆修碑	高鴨神社本殿内部銘		墓・神宮寺石佛碑		
生駒郡都跡村西之京	生駒郡平群村椿井	奈良市福智院町	南葛城郡葛城村鴨神		同所	添上郡狹川村須川	
【大和志料】ニハ「古今要覽稿」ヲ引キテ「方四寸四分、深二寸五厘六合一勻トアリ。寸尺余ノ測定ト少シク相違アリ。」	板碑型。	五輪塔（水輪以上缺）。	黒書。正面入口右側ニ「天文十二年三月十三日」及ヒ人名ヲ列記セリ、建築ニ從事セシ工人ノ戯書ナルベシ。		五輪塔（人名磨滅）。	彌陀。	
一五四六	一五四五	一五四四	一五四三	一五四二	一五四一	一五四〇	一五三九

一九庚戌	一八己酉	一七戊申	一六丁未				
石・眞言院石佛	西大寺般若理趣經箱四答						
磯城郡柳本村柳本墓	奈良市東大寺境内	生駒郡伏見村西大寺					
「天文十九年庚戌二月十五日」人名十四ヲ刻セリ。	地蔵。「堯範逆修」ノ銘アリ。	黒書。身内法大サ九寸ニ六寸八分五厘、深サ四寸八分、板厚二分、カブセ蓋、墨漆塗、四隅ニ几帳面ヲ取り面朱漆塗、身底外側ニ	天文十八年己酉一月日	寄進西大寺理趣經箱四答之内	造立高範	ト墨書セリ、蓋ノ内面ニハ朱漆ニテ左ノ文字ヲ書セリ	西大寺理趣經四答之内
一五五〇	一五四九	一五四八	一五四七				

第十一版ノ五参照。

二〇辛亥	稱名寺淨金碑	奈良市菖蒲池町	背光五輪(破片)。	一五五一
	西方寺妙悟碑	奈良市油坂町	背光五輪(無輪廓)。	
	六字名號碑	磯城郡多武峰村西口墓地	板碑型。	
	六字名號碑	磯城郡多武峰村多武峰念誦窟墓地	板碑型。 「淨永逆修」ノ銘アリ。	
	了受碑	奈良市花芝町	背光五輪。 元ト花芝町ヨリ地方裁判所裏ニ上リ行ク道路上ノ小溝ニ沿ヒテ仰臥セシガ後其小溝ヲ暗渠トナスニ當リ碑モ共ニ埋没シタリト云フ。	一五五二
	妙法碑	磯城郡香久山村吉備墓地	背光五輪。	
	春日神社繪馬	奈良市	墨書。 第十七版参照。	
	春日神社繪馬參枚	同所	墨書。 第十七版参照。	
二二癸丑	榮山寺本堂厨子上棟木銘	宇智郡宇智村子嶋	墨書。	一五五三

二二甲寅	六字名號碑	磯城郡多武峰村西口墓地	板碑型。	
	石佛	山邊郡朝和村朝日觀音堂北	觀音。	
	道入碑	添上郡佐保村不退寺北方墓地	背光五輪。	
	興福寺舍利塔厨子臺座銘	奈良市	墨書。 「天文二十三年甲寅九月六日寄進之」トアリ。厨子ノ下部ニ施主ノ人名ヲ書セリ。	一五五四
	高堂寺經藏棟木銘	生駒郡本多村椎木	墨書。 第十二版ノ五参照。	
	眞言院墓碑	奈良市東大寺境内	背光五輪。	
	圓成寺禮盤銘	添上郡大柳生村忍辱山	墨書。 正長ノ墨書ニ隣リテ忍辱山寺之地藏院禮盤也天文廿□□……以下磨滅トアリ。地藏院ハ圓成寺ノ塔頭ニシテ現今ノ本堂ヨリ東南ニ當ル。已ニ廢ス。	
(天文年間)				

二己未		三庚申			四辛酉		五壬戌		六癸戌	
眞言院双石佛	觀音堂石佛	六字名號碑	五輪種子碑	西方寺祐全碑	六字名號碑	横井佛堂藥師背光銘	西方寺道西碑	西方寺了清碑	眞言院妙秀碑	妙聖碑
奈良市東大寺境内	山邊郡朝和村岸田	磯城郡多武峰村西口 墓地	磯城郡多武峰村念誦 窟墓地	奈良市油阪町	磯城郡多武峰村多武 峰念誦窟	添上郡東市村横井	生駒郡平城村押熊	奈良市油阪町	奈良市東大寺境内	奈良市川上町伴墓
彌陀及地藏 彌陀ノ傍ニ 永祿二三月十一日幸圓 トアリ。	板碑型。	板碑型。 面ニ五輪ノ種子ヲ刻セリ。	五輪塔。	【奈良縣金石年表】ニ「祐 善」トセシハ誤リ。	板碑型。		背光五輪。	背光五輪。	背光五輪。	背光五輪。
一五五九		一五六〇			一五六一		一五六二		一五六三	

弘治乙卯		正親町	
石		三丁巳	二丙辰
生駒郡平群村平等寺	石	石	石
磯城郡多武峰村念誦 窟墓地	西方寺高祐碑	來迎寺宗眞碑	石
奈良市油阪町	山邊郡都介野村來迎 寺	磯城郡多武峰村念誦 窟墓地	磯城郡多武峰村西口
地藏立像。 天文廿四季七月十五日日本 願快秀トアリ。 蓮座高七寸、像高三尺六 寸五分、背光高五尺四寸 五分平等寺部落ニ入ル丁 字路ニ在リ。	地藏立像。 天文二十四年ノモノ。	五輪塔。	地藏立像。 弘治四年ノモノ。
一五五五		一五五六	一五五七
			一五五八

八乙丑		七甲子					
石	眞言院淨善碑	石	來迎寺實□碑	眞言院石塔	西方寺淨善碑	妙阿彌碑	石佛
(不退寺邊六十六部尊)	奈良市東大寺境内	奈良市肘塚町	山邊郡都介野村來迎寺	奈良市東大寺境内	奈良市油阪町	同所	奈良市川上町伴墓
地藏立像。	五月五日 ト刻セリ。	背光五輪(無輪廓)。	五輪塔。 「堯範逆彦」ノ銘アリ	背光五輪(破片)。 モミヤ池ノ南堤ノ外、小渠ノ北側ニ在リ。 上部ニ六字名號、其兩側及下ニ人名五、其下ニ永祿七子	背光五輪。	背光五輪。	彌陀。
一五六五				一五六四			

九丙寅		一〇丁卯		一一戊辰			一二己巳		元龜庚午	
石	六字名號碑	石	佛	西方寺妙善碑	東大寺佛餉鉢	聖光寺石佛	西寺方善圓碑	石	聖光寺双石佛	觀音堂石佛
磯城郡多武峰村多武峰念誦窟	山邊郡都介野村並松	奈良市油阪町	奈良市	奈良市鳴川町	奈良市油阪町	添上郡狹川村中ノ墓	奈良市鳴川町	磯城郡三輪町金屋	磯城郡多武峰村西口	墓地
地藏立像。	板碑型。	地藏。 並松小學校ノ西一丁許道路北側ニ在リ。	背光五輪(破片)。	彌陀。	背光五輪。	五輪塔(人名磨滅)。	地藏及彌陀。 地藏ノ傍ニ元龜元二月廿七日妙西ト刻セリ。	十一面觀音立像。	地藏立像。	
一五六六	一五六七	一五六八		一五六九			一五七〇			

		天正 癸酉	三 壬申	二 辛未	
慶 順 碑	石 佛	妙 春 碑	眞 言 院 妙 清 碑	長 谷 寺 經 机	良 觀 碑
添上郡東里村中川	磯城郡柳本村柳本墓	添上郡佐保村不退寺 北方墓地	奈良市東大寺境内	磯城郡初瀬町	奈良市半田町
背光寶篋印塔。	地蔵。 天正二年甲戌十二月 二日道貞敬白 トアリ。	背光五輪。	背光型(破片)。	金泥書。 根來塗金銅金具ニテ飾ラ レタル經机。 第十八版參照。	半田町古物商店ノ店頭ニ アリ。
				一五七二	一五七三

		三 乙亥	二 甲戌	四 丙子
眞 言 院 妙 西 碑	石 佛	眞 言 院 道 祐 碑	法隆寺上宮王院樹	蓮 臺 寺 石 佛
奈良市東大寺境内	磯城郡多武峰村西口 墓地	生駒郡平城村押熊	生駒郡法隆寺村	磯城郡香久山村吉備
背光五輪。	地蔵。 銘ニ曰ク 天正四年丙子淨慶禪定門 二月九日施主左近五郎	背光五輪。	刻銘。 今法隆寺寶藏内ニ在リ。 第十一版ノ六參照。	墨書。 十六所神社ハ靈山寺本堂 後方高地ニ在リ、本殿及 其左右ノ二殿トハ特別保 護建造物タリ。
				一五七四

五 丁 丑			
西 方 寺 淨 願 碑	空 海 寺 英 海 碑	供 養 碑	石 佛
奈良市油坂町	奈良市雜司町	磯城郡柳本村柳本墓 地	奈良市雜司町 添上郡大柳生村大慈 仙
背光五輪。	背光五輪(破片)。 トアリ。	高約一間、上部ニ阿彌陀 一軀ヲ陽刻シ、其下ニ數 段ニ人名約百ヲ刻ス、佛 像ノ左右ニ 天正五年丁丑 六月十五日 トアリ。	【奈良縣金石年表】ニ「彌 陀」トセシハ誤リ。 地藏。 板碑型。 トアリ。 天正四九月上旬造佛成 就畢 トアリ。
一五七〇	一五七九	一五七七	九四

六 戊 寅			
西 方 寺 佐 那 碑	龍 空 碑	蓮 臺 寺 西 佛 碑	藥 師 寺 反 錢 樹
奈良市油坂町	添上郡東市村白毫寺 鹿園墓地	磯城郡香久山村吉備	生駒郡都跡村西ノ京
背光五輪。 【奈良縣金石年表】永正六 年ノ欄(四十)ニ掲ゲシハ 誤リ。	背光五輪。	背光五輪。 刻銘。 第十一版ノ七參照。	背光五輪(上半缺損)。 釋迦。
一五七八	一五七九	一五七九	九五

一一 癸未										一一 甲申										
石	眞言院	眞言院	奉樂寺	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院
佛	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札	修理札
磯城郡多武峰村多武峰念誦窟	奈良市東大寺境内	磯城郡多村秦庄	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内	奈良市東大寺境内
彌陀立像。	背光五輪。	墨書。第十版ノ六参照。	背光五輪。	背光五輪(破片)。	背光五輪。	此七基皆同式同年月ニテ人名ノミテ異ニセリ、其様式左ノ如シ	天正十二年	(人名)	甲二月十五日	人名ノ上ニ梵字五(キア、カ、ラ、バ、ア)ヲ刻セシモノアリ、又干支ヲ缺ケルモノモアリ。										
一五八三										一五八四										

九 辛巳										一〇 壬午										
眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院	眞言院
奈良市東大寺境内	奈良市雜司町	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市	奈良市
誤リ。	彌陀及地藏。地藏ノ傍ニ「天正九年十一月九日妙清」トアリ。永祿二年ノ欄参照。	背光五輪。	自然石。	墨書。机裏ニ左ノ文字アリ	墨書。龍王御机	于時天正九年辛巳八月日	少學頭長照	大工五條孫四郎	墨書。廢安居屋影向ノ間ニ掛ケシモノ。第十七版参照。	背光型。	背光五輪。									
一五八一																				

一七 己丑	一六 戊子	一五 丁亥	一四 丙戌
西 方 寺 宗 林 碑			聖 光 寺 双 石 佛
奈 良 市 油 坂 町			奈 良 市 鳴 川 町
背 光 五 輪。			地 藏 及 彌 陀。 彌 陀 ノ 傍 ニ 「 天 正 十 四 二 月 十 二 日 乘 西 」 ト 刻 セ リ。 (元 龜 元 年 ノ 欄 參 照)。 彌 陀 (?) 立 像。 露 出 セ ル 大 岩 面 ヲ 高 二 尺 三 寸 五 分、 巾 一 尺 六 寸 五 分、 深 平 均 三 寸 ノ 舟 後 光 型 ニ 鑿 リ 凹 メ、 高 二 尺 二 寸 五 分 ノ 半 肉 彌 陀 (?) 立 像 ヲ 刻 セ リ、 像 兩 側 ノ 文 字 左 ノ 如 シ 墨 書 逆 修
一五八九	一五八八	一五八七	一五八六

圓 成 寺 境 内 春 日 白 山 堂 棟 札	當 麻 寺 西 塔 圓 瓦	願 應 碑	西 方 寺 妙 一 碑	西 方 寺 妙 善 碑	眞 言 院 覺 順 碑	眞 言 院 清 雲 碑	石 佛	墓 碑
山 添 上 郡 大 柳 生 村 忍 辱	北 葛 城 郡 當 麻 村 當 麻	奈 良 市 川 上 町 伴 墓	同 所	奈 良 市 油 坂 町	同 所	奈 良 市 東 大 寺 境 内	北 葛 城 郡 瀬 南 村 池 尻	同 所
墨 書。 永 正 十 五 年 ノ 棟 札 ノ 裏 面 ニ 記 セ リ。		五 輪 塔 (水 輪 以 上 缺)。	背 光 五 輪。	背 光 五 輪。	背 光 五 輪。	背 光 五 輪。	地 藏。	背 光 五 輪。 梵 字 五、 其 下 ノ 人 名 磨 滅、 人 名 ノ 左 右 ニ 天 正 十 二 年 甲 申 十 月 一 日 ト 刻 セ リ。
			一五八五					

二癸巳	三甲午	四乙未	慶長丙申	二丁酉	三戊戌	四己亥	五庚子
法隆寺新堂棟札 （龍田神社 鈴）	空海寺利隆碑	忍・墓・春・碑	眞言院春照碑 蓮長寺妙泉碑			妙・慶・碑	淨・五・切・院・淨・賢・碑 春・碑
生駒郡法隆寺村 （生駒郡三郷村立野）	奈良市雜司町	奈良市川上町伴墓 添上郡柳生村柳生柳 生氏墓地	奈良市東大寺境内 奈良市油坂町			添上郡東市村古市墓 地	奈良市雜司町 奈良市川上町伴墓
文祿二癸巳二月日ノ銘アリト云フ 【官幣社什寶目錄】所載。 墨書。 札長三尺八寸七分、巾三寸四分、厚七分、檜製。	自然石。	背光五輪。	背光五輪。 背光五輪。 文祿五年ノモノ。 背光五輪（破片）。			背光五輪。	背光五輪。
一五九三	一五九四	一五九五	一五九六	一五九七	一五九八	一五九九	一六〇〇

六辛丑					
春日神社貝桶	道・淨・好・碑	淨・祐・碑	西・方・寺・道・知・碑	妙・正・碑	眞・言・院・春・教・碑
奈良市	同所	奈良市川上町伴墓	奈良市油坂町	奈良市水門町	奈良市東大寺境内
墨書。 八角形、總高一尺一寸二分、徑（邊ヨリ邊）一尺、陽光院御息所藤原秀子ノ寄進ニ係ル、蓋ノ裏面ニ左ノ墨書アリ 新上東門院御寄進也 別春日神前毎日御祈禱可奉抽精誠者也 慶長六年辛巳十月廿三日	五輪塔（水輪以上）（缺。）	背光五輪。	【奈良縣金石年表】ニ「背光五輪」トセシハ誤リ。	五輪塔。 眞言院ヨリ西一丁餘、袈裟川北岸民家ノ東端附近	背光五輪。 背光五輪。
一六〇一					

唐招提寺金堂觸口
生駒郡都跡村五條

刻銘。

五輪塔。
各輪ノ各面ニ刻セル文字
左ノ如シ

面側左 (字梵)アキ (々)カ (々)ラ (々)バ	面背 奉 寄 進 五 輪 不 動 院 敬 白	面側右 (字梵)ノアキ (々)ノカ (々)ノラ (々)ノバ ア ン (々) 十一月九日	面正 南 無 増 賀 上人 六月九日	空 風 火 水 地 長保五年 慶長七年
---------------------------------------	--	---	--------------------------------------	---------------------------------------

七
壬
寅

増
賀
碑

磯城郡多武峰村多武
峰念誦窟

銘文ニ據ルニ慶長七年新
ニ増賀上人ノ碑トシテ五
輪塔ヲ刻シ長保五年ノ銘
ヲ刻ミテ上人ノ入寂ノ所ニ
建テシモノニシテ、單ニ
其様式ヨリ觀ルモ到底長
保年間ノ者ニ非ズ。塔高
三尺、地輪巾九寸八分、
高七寸四分。
【奈良縣高市郡史料】(二八)
ニ高市村大字尾曾威徳院
境内ニ長保五年ノ銘アル
増賀ノ碑ノ存セル旨ヲ記
セルモ今亡シ、此寺ニハ
廢紫蓋寺址ヨリ移セシト
傳フル初重ノ四方ニ四佛
ノ種子ヲ刻メル十三重石
塔(今九重ヲ存)一基アルモ
此ニ就テハ何等ノ傳説ナ
シ。
【奈良縣金石年表】長保五
年ノ欄(第三三及)ニ「高市
郡史蹟概覽」ニ據リテ「威
徳院増賀碑」ヲ掲ゲシハ
誤リ。

八 癸 卯				
朝護孫子寺本堂棟札	藥師寺制札	西方寺妙西碑	弘盛碑	休岡八幡社中殿棟札
生駒郡平群村信貴畑	生駒郡都跡村西ノ京	奈良市油阪町	添上郡標本町標本、大塚墓地	休岡八幡社北殿棟札
墨書。 札長五尺一寸、巾九寸三分、厚六分五厘、文字多ク消滅セリ、右方下部ニ「慶長七年寅極月吉日」トアリ。	墨書。 巾二尺〇四分、高一尺二寸三分、厚九分、檜製。	背光五輪。	背光五輪。 大塚ハ古墳ナリ。	墨書。 札長三尺二寸四分、巾五寸一分、厚二分五厘。「正月十八日新初、六月二十六日落成」ノ旨ヲ記セリ。本殿棟木ニ打付ケアリ。
一六〇六	一六〇三			墨書。 第十版ノ七參照。 文ニ曰ク

九 甲 辰				
休岡八幡社中殿向拜南側墓股上斗銘	唐招提寺長器樹	觀音堂六字名號碑	眞言院妙久碑	空海寺守成碑
同	生駒郡都跡村五條	山邊郡朝和村岸田	奈良市東大寺境内	奈良市雜司町
さいまきまう から北室彌五郎 慶長八年卯 卯年四月吉日	刻銘(籠字)。 舍利殿供米ノ樹ナリ。 第十一版ノ八參照。	背光型。	背光五輪。	背光五輪。
			同	磯城郡多武峰村多武峰念誦屆
			生駒郡法隆寺村	吉野郡吉野村吉野山
			刻銘。 慶長九年三月二十六日 トアリ。	刻銘。
			一六〇四	一〇七

道心碑	唐招提寺舍利殿舍利寶座藏手金具	西方寺宗誓碑	春日神社碑	西方寺道清碑	宗月碑	東大寺廣目天牀内木札
磯城郡柳本村柳本墓	生駒郡都跡村五條	奈良市油坂町	奈良市	奈良市油坂町	奈良市川上町伴墓	奈良市
背光五輪	刻銘	背光五輪	七 【奈良縣高市町史料】(六十一)所載。	板碑型。	五輪塔(水輪以上缺)。	墨書。 第十四版ノ二参照。
一六二	一六三	一六四	一六五			

續奈良縣金石年表〔終〕

續奈良縣金石年表附圖 自第一版至第二版

圖 版 目 錄

- | | | |
|-------|------------------|------------------|
| 第一版。 | 生駒郡伏見村西大寺、 | 西大寺文永七年舍利塔銘拓影。 |
| 第二版。 | 同 | 同 正和三年金剛盤銘拓影。 |
| 第三版。 | 吉野郡大淀村比曾、 | 世尊寺明應五年湯釜寫真。 |
| 第四版。 | 磯城郡安倍村山田、 | 東大谷比賣神社石燈銘拓影。 |
| 第五版。 | 生駒郡法隆寺村、 | 法隆寺傳法堂平瓦銘拓影。 |
| 第六版。 | 同 | 同 圓瓦銘拓影。 |
| 第七版。 | 同 都跡村五條、 | 唐招提寺金堂千手觀音修理銘寫真。 |
| 第八版。 | 同 | 同 講堂彌勒鉢內銘寫真。 |
| 第九版。 | 生駒郡法隆寺村、 | 法隆寺西圓堂悔過板銘一部拓影。 |
| 第十版。 | 棟札類七種。 | |
| 第十一版。 | 棟札及銘文等八種。 | |
| 第十二版。 | 棟木銘五種。 | |
| 第十三版。 | 唐招提寺舍利殿舍利寶座裏面墨書。 | |

- 第十四版。
- 第十五版。
- 第十六版。
- 第十七版。
- 第十八版。
- 第十九版。
- 第二十版。

以上

彫刻像裏面及牀內銘等六種。
 彫刻像、工藝品銘文等五種。
 工藝品銘文等六種。
 春日神社繪馬裏面銘四種。
 磯城郡初瀬町、長谷寺經机裏面圖及立面圖。
 大股若波羅密多經厨子 其一。
 其二。

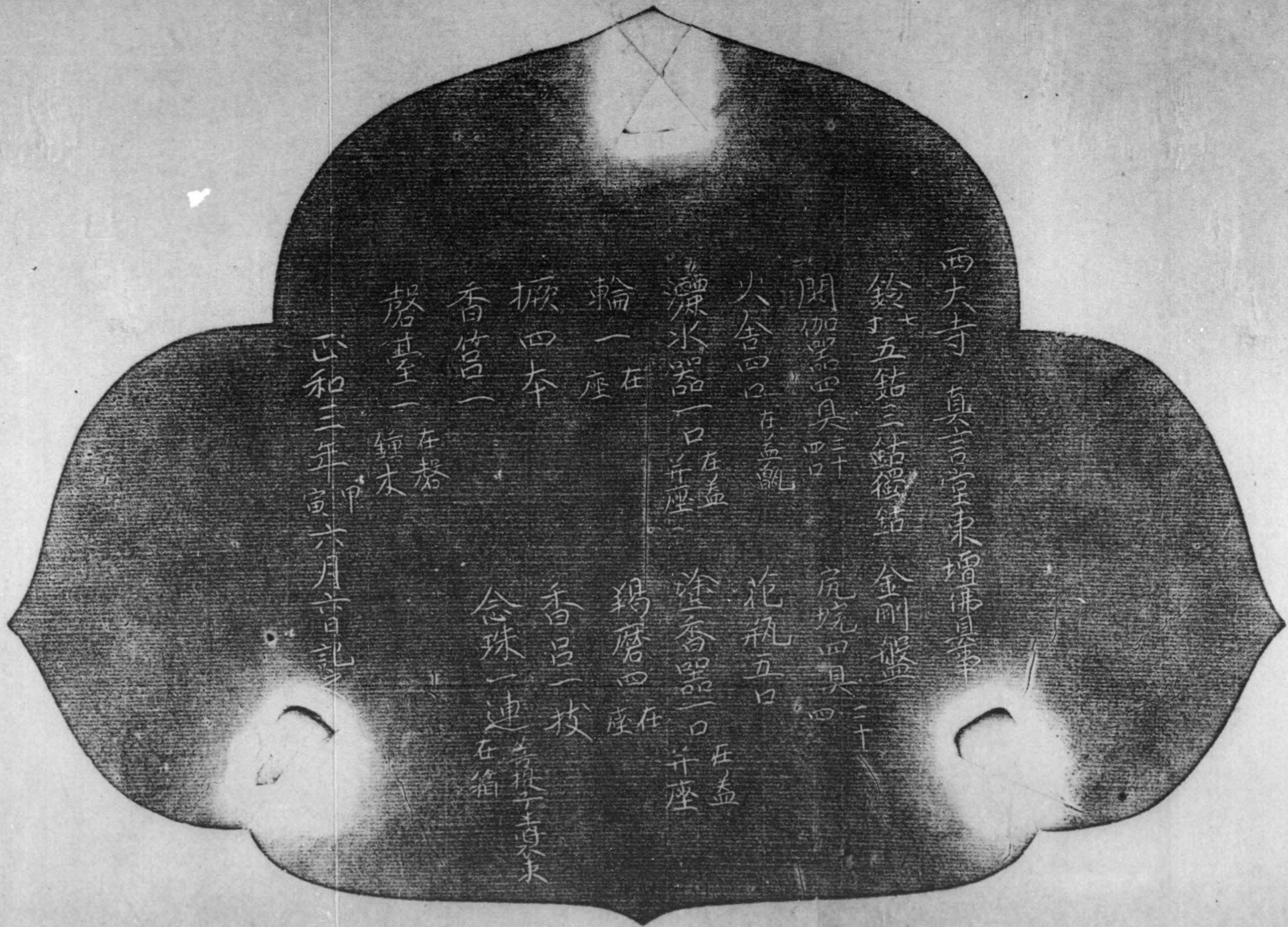
- 第十七版。春日神社繪馬裏面銘四種。
 - 第十八版。磯城郡初瀬町、長谷寺經机裏面圖及立面圖。
 - 第十九版。大般若波羅密多經厨子 其一。
 - 第二十版。同 其二。
- 以上

第一版 西大寺金銅舍利塔臺座裏面銘

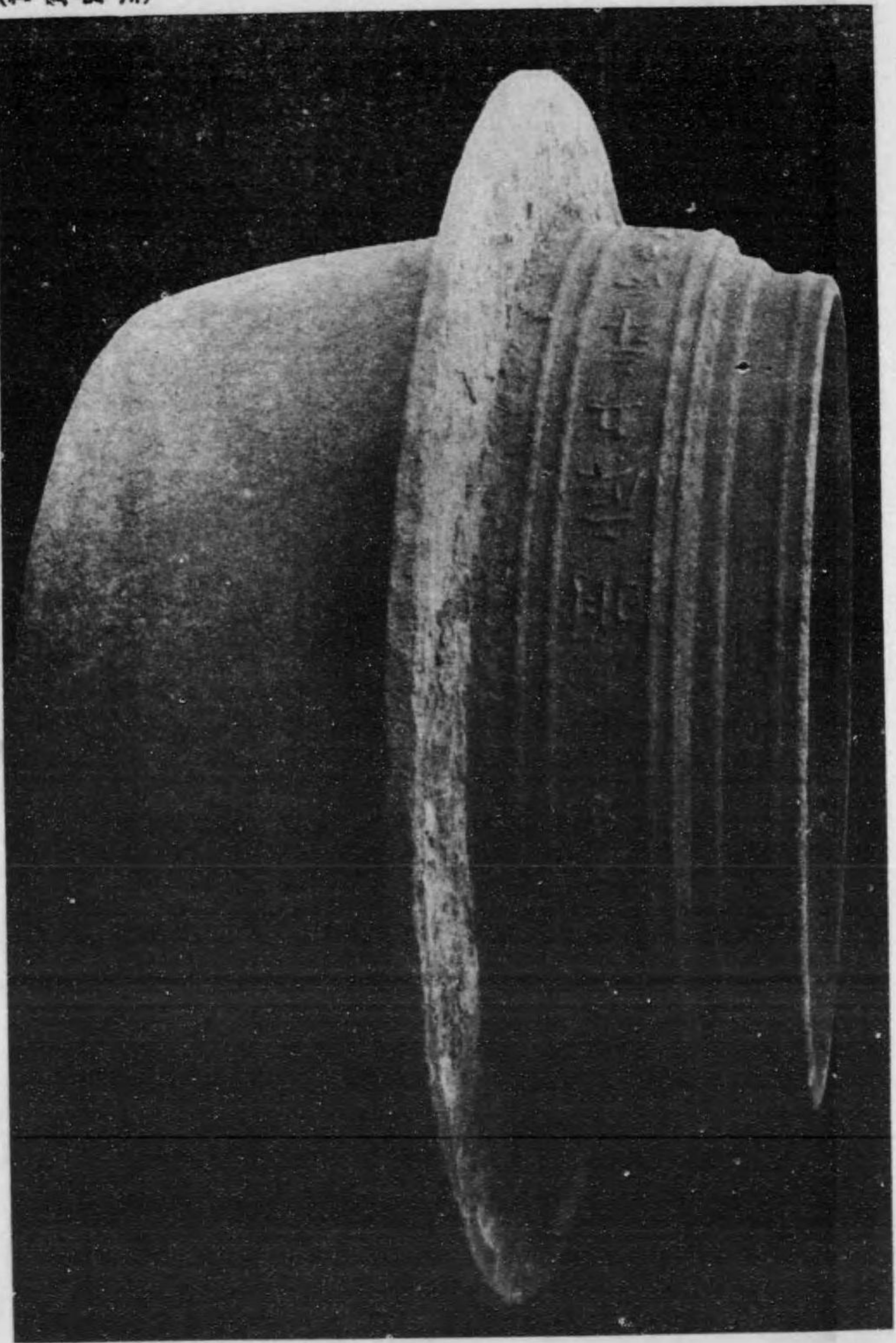
本願主西大寺衆首沙門敬告

舍利之流布當時雖感稟承之明銳古今尤
 節而去年秋不意咸得指提寺舍利壹粒相
 待之占來信仰無貳機緣之純感欽且千
 介以蓮蓮相續復相承不端之舍利而叁粒
 或傳從靈寺之寶蓋或出從名山之神油無
 上之法寶行時而自集此際之祥也寧可不
 崇哉因茲召鑄叁人全銅曹谷一奉奉納此
 佛舍利所安置西大寺塔院也永為一寺之
 聖寶將傳萬代之後業而己

文永七年感文庚子六月一日也己金



零寸 | 一寸 | 二寸 | 三寸 | 四寸 | 五寸 | 六寸 | 七寸 | 八寸 | 九寸 | 一尺 |



天沼野真

第三版

第四版 東大谷日女神社石燈銘拓影



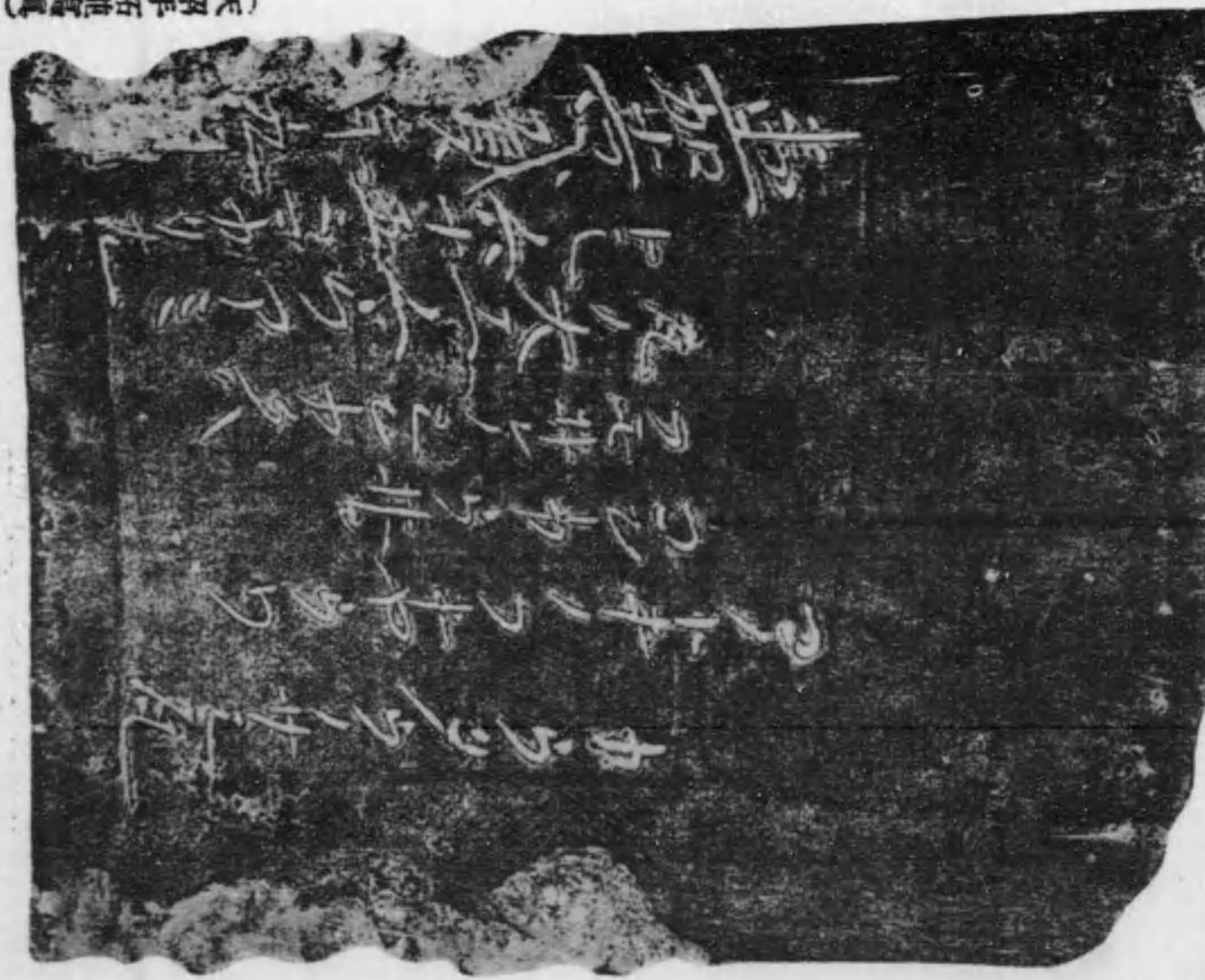
(銘文)

(天沼手拓進寫真)

善哉燈爐 微妙光明
皈功於本 施德於靈
无間煙滅 有漏水清
願我一念 利他衆生

勸進行念
永和元年乙卯八月一日造立之
大工行長

一尺 | 八寸 | 六寸 | 四寸 | 二寸 | 零寸 |



(天沼乎拓並寫)

一尺二寸 一尺 八寸 六寸 四寸 二寸 一寸 零寸

カウタウノサレ瓦
(鑿)

コノトキノアキヤウ
(奉行)

コソコウキソ
(金光院及金剛院)

フモキソノソノカ久?
(佛門院)

瓦ノ大エユウアミ

トシ六十五ニヤカリナル

嘉吉貳年九月日?

(銘文)

大工ユウアミトシ六十九

アアソ^ト三^ノ年九月廿五日

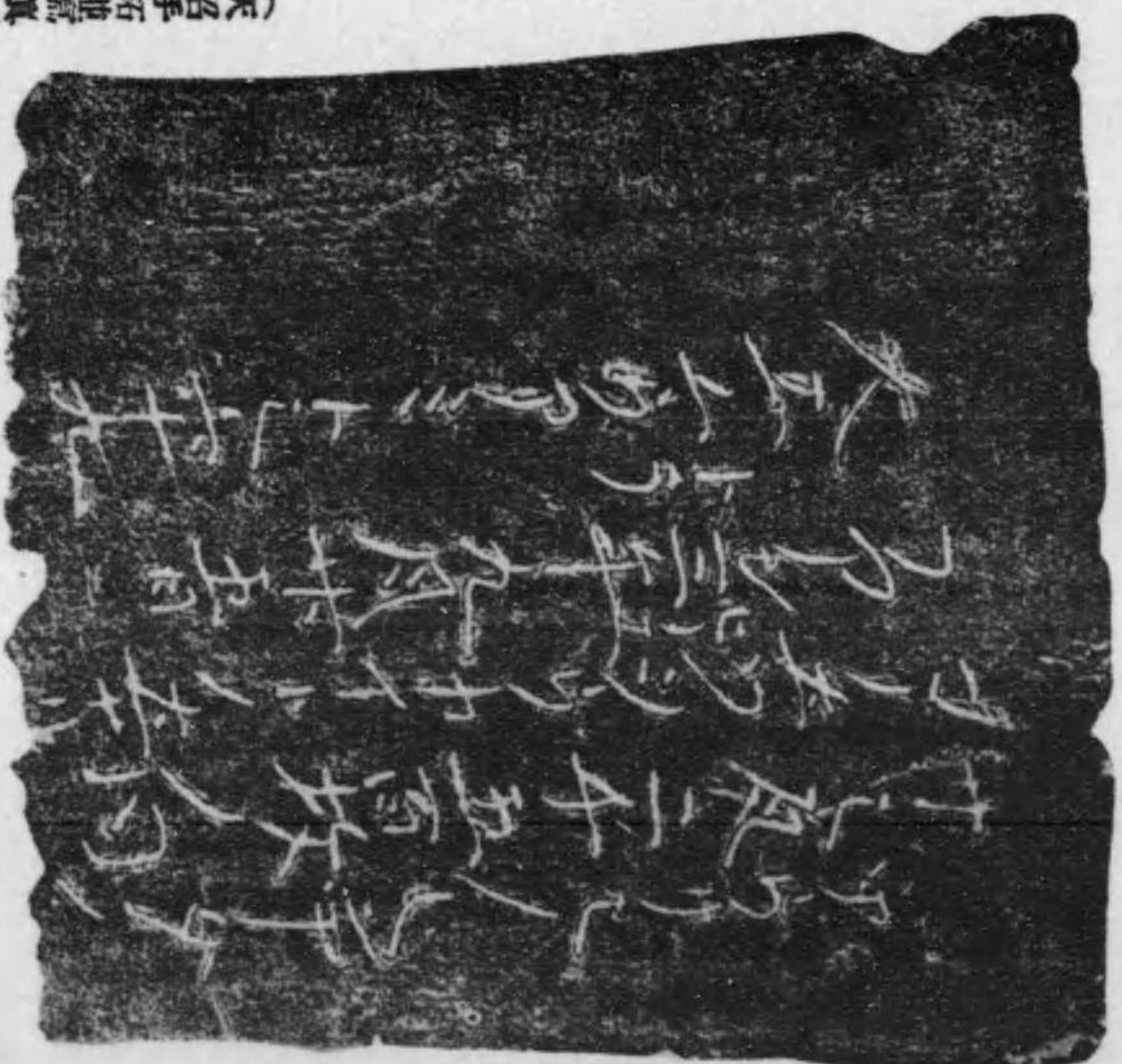
コノ上ヲチウカイトノ上ナリ
(大垣内?)

サレ瓦二千五百枚ノ内

ヲウカリレノレソコタノ
(法隆寺)

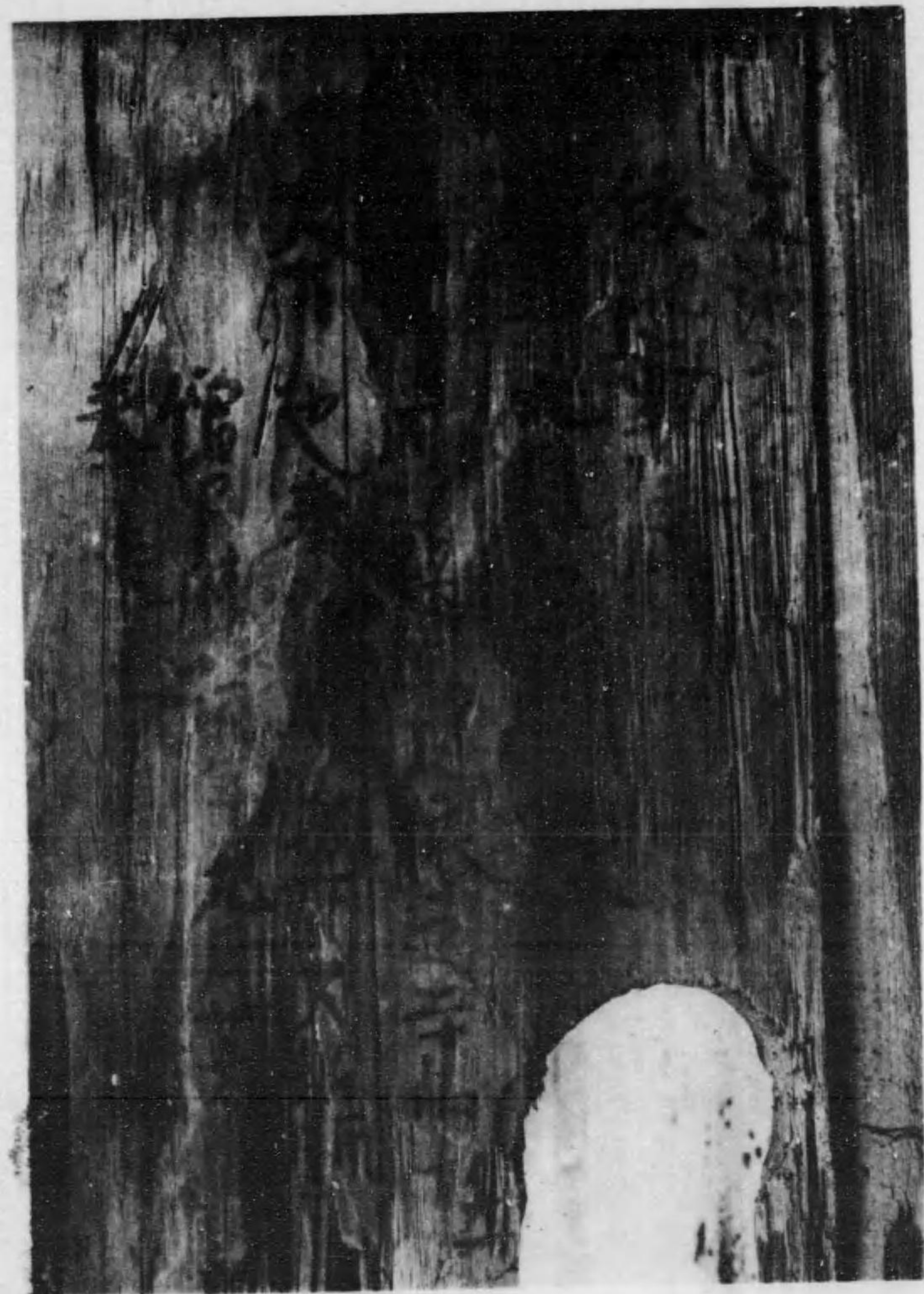
一尺
八寸
四寸
二寸
零寸

(天沼手拓墨寫真)



第六版

第七版 唐招提寺金堂千手觀音修理銘

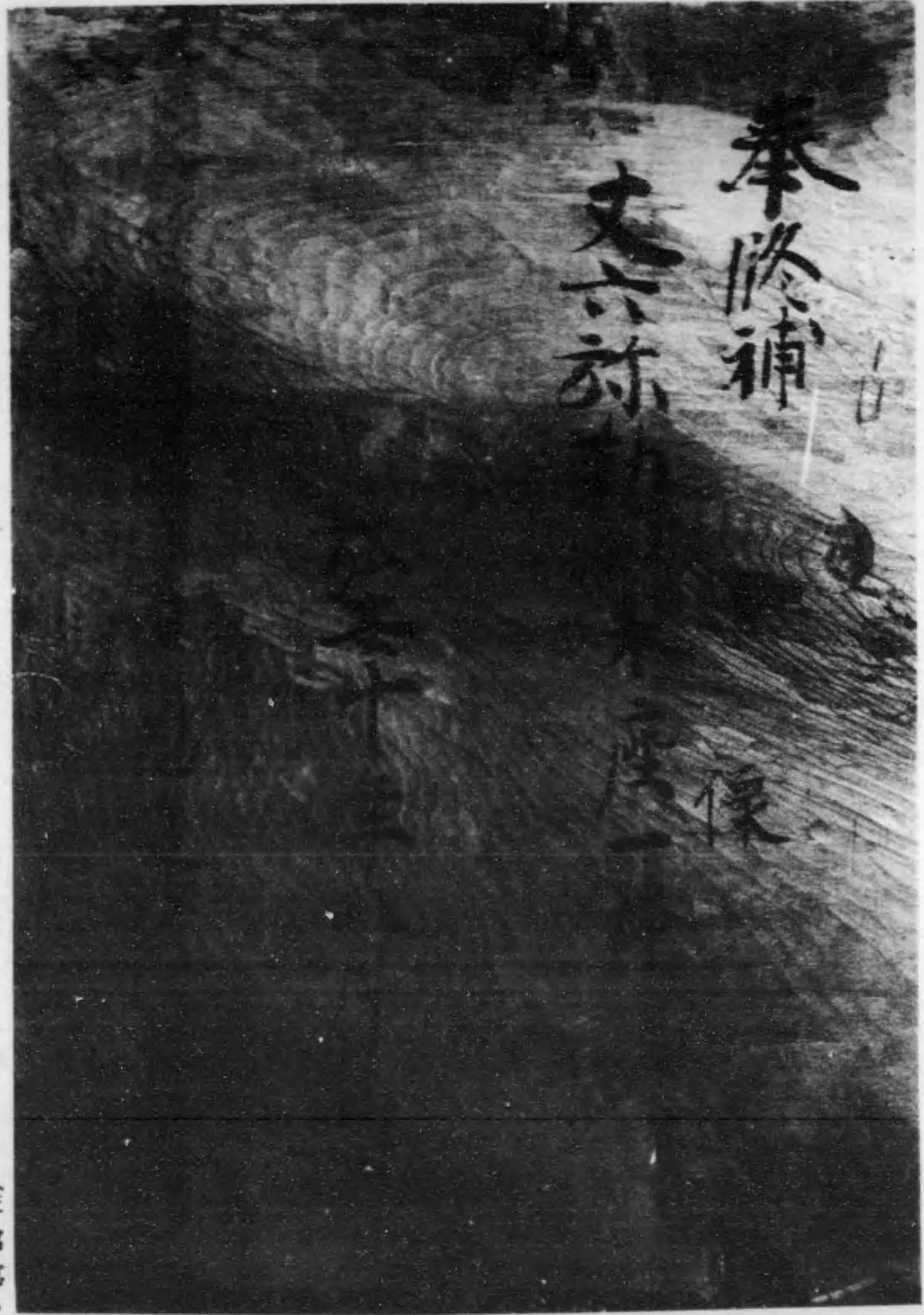


(天沼寫真)

八寸 | 七寸 | 六寸 | 五寸 | 四寸 | 三寸 | 二寸 | 一寸 | 零寸 |

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through or a very light inscription.

第八版 唐招提寺講堂彌勒像跡内銘



(天沼寫真)

天沼寫真

三十一
三十
二十九
二十八
二十七
二十六
二十五
二十四

奉施入法隆寺西園堂悔過帳
右奉施八如件

嘉熙元年丙子十二月日

善弘大法師

彫刻幸順

(天沼手拓前寫真)

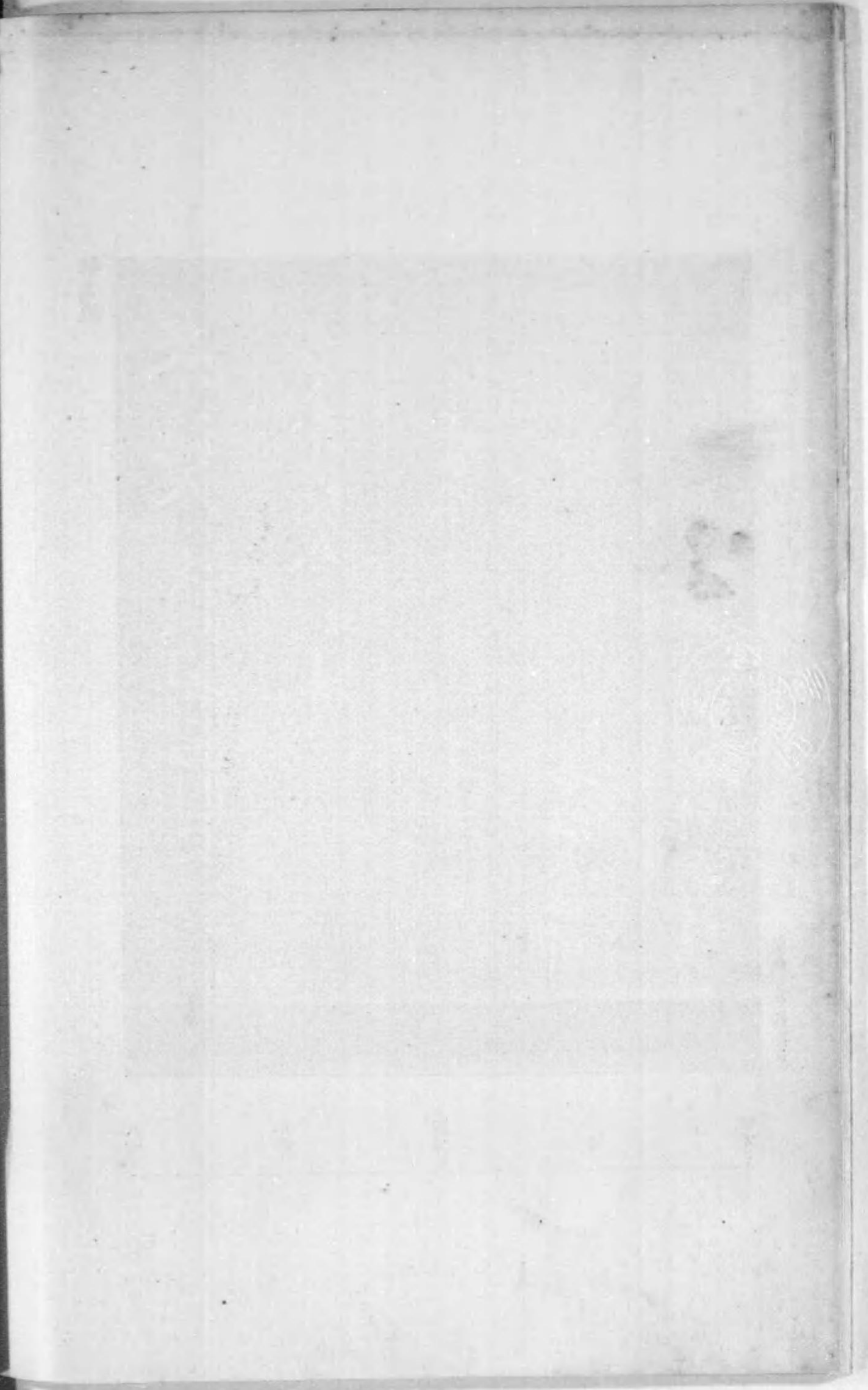
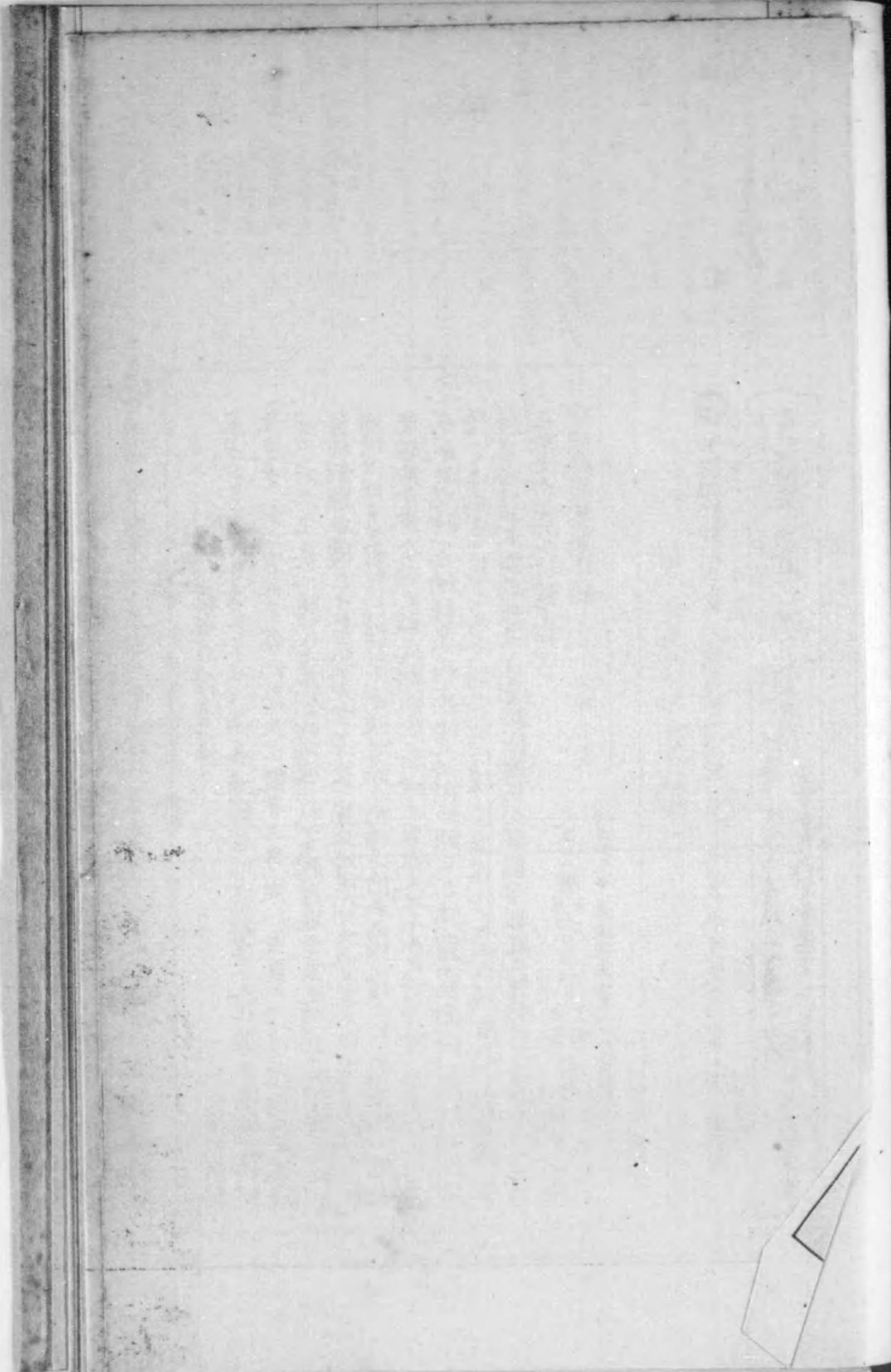
八寸

六寸

四寸

二寸

零寸



第十版 棟札類

一三五編尺

二四六七編尺

① 生駒郡富雄村大字中 靈山寺本堂棟札 長十九寸五分 中七寸八分 厚五寸

靈山寺 本堂棟上

(裏面)

② 生駒郡都跡村西京 藥師寺東院堂棟札 長九寸八分 中六寸

加安八年三月廿一日

④ 山邊郡三階堂村大字備前 天皇神社棟札 長三尺一寸三分 中六寸四分五分

後永三年丙子 藤大工藤井國長

奉造立 天王宮御社一字上棟 大工藤井國長

林鐘廿六日 藤井國純

(裏面)

右此鎮守者大梵天三婆利米女中牛頭天王 東天滿天
奉崇之者自文永九年之草創及應永元年造立一百廿四
防州上野寺住侶賴秀諸國湧浪之時奉持社殿被壞與全
法界且邪之合力奉持理鎮守賴懷者也乃法興年等後

⑤ 高市郡今井町大字小細 棟札 長九寸八分 中六寸八分 厚九分

上棟 一切日皆善 一切善皆賢 謹佛皆威德 醫治皆斷滿 以斯誠實言 願哉成吉祥 小細普賢寺 道善 孫太郎 文

新堂院棟上於安七年七月廿日勤進聖人圓覺大工桶國誌

至文祿二年三月廿四日(通書)

生駒郡法隆寺村 法隆寺新堂棟札 長三尺五寸五分 中四寸二分五厘 厚四分 檜製

棟上 安永七年七月廿日

供僧六人 一和上阿闍梨行寬 僧圓覺行音 僧德覺行信 僧德覺行信 僧德覺行信 僧德覺行信
 右為法隆寺 大工頭末清
 三昧僧六人 二和上 玄實 僧源真僧德珍 僧德志 僧長珍僧行實 僧德志
 勤進寺至道堂 引頭國重

安永七年七月廿日 勤進寺至道堂 一和上阿闍梨行寬

八分 中六寸 厚七分 檜製

二日達之 大工 末清 權大工 宗藏

延寶二年八月八日蓋京被指) 磯城郡多利奈庄 泰樂寺千手修理札 長三尺 中一尺六寸七分 厚二分五厘 檜製

權大工藤井國重 大工五 藤井國重 結聚各 藤井國重 結聚各

頭天王 東天滿天神 年造王一百廿四年 奉許社保德像並余演 也乃法皇等後所教白

善道全 時之大工 即後藤之即 文明十年六月十二日當住觀秀 白 敬

奉安置千手尊像其來尚 情尋遊觸在印土勝曼夫人化震且惠恩禪師 生扶衆勝上官大子當初為救世觀音之再誕利生異于他喻无物云云然為 厥左右之臣秦川勝俊土草創此場並我十牛塔起過余算之類極木也實登言何 薩埵對驗學慢之乎粵弘仁比空海和尚編此地港入功德地至平人映德清堂地也數 珊瑚浮明月之影云雖然不測彼尊而手願乎仙奉以精誠意有與焉福元二相丹 造結御牛奉全備之殿此精誠對秦姓之家永久以千手之鏡福振慈惠救世之行力 痴風自吹掃一毛猶輕衆病忘除之神術如朝日之消霜而路斷誇勳功之偉祿 預官位踰等輩之武俗刺宗征伐棟梁偏依此尊之示現者也乞願神社 嚴重而佛法無懈怠殊者寺菴庄蘭顯然而顯賤者眼近之旅鎮而千僧與哉唯此尊 在威光而已仍不修續文如件 年積宗良 天正十曆六月十四日 斗宿 宗云 白 佛二四王手者源次再九百五十年者藏正

生駒郡都跡村西京八幡宮棟札(北殿) 長三尺 中二寸七分 厚二分 檜製 當社大施主 内大臣左近衛實朝臣本賴卿 奉安置千手尊像其來尚 情尋遊觸在印土勝曼夫人化震且惠恩禪師 生扶衆勝上官大子當初為救世觀音之再誕利生異于他喻无物云云然為 厥左右之臣秦川勝俊土草創此場並我十牛塔起過余算之類極木也實登言何 薩埵對驗學慢之乎粵弘仁比空海和尚編此地港入功德地至平人映德清堂地也數 珊瑚浮明月之影云雖然不測彼尊而手願乎仙奉以精誠意有與焉福元二相丹 造結御牛奉全備之殿此精誠對秦姓之家永久以千手之鏡福振慈惠救世之行力 痴風自吹掃一毛猶輕衆病忘除之神術如朝日之消霜而路斷誇勳功之偉祿 預官位踰等輩之武俗刺宗征伐棟梁偏依此尊之示現者也乞願神社 嚴重而佛法無懈怠殊者寺菴庄蘭顯然而顯賤者眼近之旅鎮而千僧與哉唯此尊 在威光而已仍不修續文如件 年積宗良 天正十曆六月十四日 斗宿 宗云 白 佛二四王手者源次再九百五十年者藏正